
BLEACH ~ The Strange Record ~

えむぴー 5

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BLEACH ～The Strange Record～

【Nコード】

N3268W

【作者名】

えむぴー5

【あらすじ】

BLEACHを読み返しててハリベル様のおっぱいを見てたら我慢できなくなつたので書く。

だからといってエロイ話は期待しないでいただきたい。

このお話は妄想、中二病、オリ主、キャラ崩壊、その他諸々を含みます。

勢いだけの見切り発車ですのでどうか生暖かい目で見てやっていただけると幸いです。

Unexpected Death and New Life

最後に見た光景、一番印象に残っているのは光だ。

夜道を照らす街灯を反射する小さな包丁。

気づいた時にはそれは僕の腹に埋まり、痛みより先に疑問が頭をよぎった。

何故？

なんでこんなことになっているんだろう。

僕の腹に穴を開けてくれたクソ野郎　女だったけど　は奇声を

あげながら何度も僕の腹を、胸を、体中を刺す。

遅れて訪れた激痛に悲鳴をあげ、僕は相手を突き飛ばした。

身体に力が入らない。

水音をたてて仰向けに倒れふす僕。

刺された場所が熱い、呼吸が出来ない。

荒い息をつきながら、これは死んだなあ、と考えていると突き飛ばした相手が僕の上に馬乗りになり、包丁を振りかぶった。

「……………あなたがわるいのよ……………けどいいわ……………ゆるしてあげる……………
……………これであなたはわたしのものだから」

言い終わるや否や降りおろされた包丁は僕の左胸に沈む。

傷口から溢れる血液と共に僕の意識と命も流れ落ちていく。

急速に暗くなっていく視界の中、相手の顔を見た。

そこには“全く見覚えのない女”が歪な笑みを浮かべている。

誰だよお前。

僕の命はそこで途切れた。

いや、ホント誰だよお前。

次に目覚めたとき僕は何かの列に並んでいた。

あれ？死んだんじゃない？と思い、身体を見てみるとどこにも異常はない。

いや、あった。

僕は何故か時代劇の村人が着るような安っぽい着物を着ている。

はて？と思い周りを見回すと列に並んだ人間は皆似たような格好をしている。

気になったので前に並んでるおじさんに聞いてみることにした。

「すみませんここでですか？それとみんな何のために並んでるんですかね？」

「ああ？俺もよくは知らんが尸魂界つてとこだろ？そんで流魂街つて場所に行くための順番待ちだ」

「……そ、そうるそさえてい？……るこんがい？」

聞き覚えはあるが有り得ない言葉が返ってきた。

「なんだにーちゃん、死神つてやつに説明されなかつたかい？」

「……死神？」

まさか、あれか？ブリーチの世界だったか？

まだ色々喋っているおじさんに礼を言い、考える。

とりあえず僕は死んだみたいだ。

あの女マジで誰だよ、ストーカー？人違いとかじゃないだろうな？もし人違いなら泣けてくる、でもその可能性が高そうだよなあ、あんな美人知ってたら覚えてると思うし。

いやしかし尸魂界イ？なんで漫画の世界に来てんだよ。

「はいそこー、ボーっとしてないで進んで進んで！」

と、うだうだ考えてたらだいたいぶ列が進んでたみたいだ……って死神だ！

列の先、下っ端っばい死神が何人か列を整えたりと何かをやっている。

うわーあれが死覇装かあ。

そうこうしていると僕の順番が来たよう受付みたいな事をしてい
る死神さんの前にでる。

「はいご苦労さん、整理券みせてねえ〜」

「え？」

整理券？

「え？つて……列に並んだ時に貰ったでしょ？」

いや、気づいたらここにいたんだけど……。
とりあえず衣服の中を探ってみる。

………これか？

「お、それぞれ……つてこれは！？」

死神さんは何やら驚いた様子でゴソゴソと机の下をあさり出した。

「お〜あたりい〜！！」

死神さんの手に握られていたのはくじ引きとかでよく見る鐘、それをカランカランと打ち鳴らした。

周りが響めき、拍手がなった。

いや、なにこれ？

「いやいやお客さん運がいいね！マジで！！そんなラッキーなあなたに真央霊術院への入学資格をプレゼント！皆さん拍手〜」

更に拍手が大きくなる。

おいおい、周りの人絶対何も知らずに拍手してるだろ。

「まあ詳しいことは後日、正式に通達するんで……ほい、とりあえず今はここに行つてね〜」

そう言つて通行手形の様なもの渡された。

「それ持って奥の門をくぐったら勝手につくから、次の方へ」
色々聞きたい事があったが話は終わりとばかりに追い出された。
仕方ないので奥へと進む。

しかし真央霊術院……死神の学校かぁ。

まあ面白そうではあるかな。

僕は苦笑を浮かべながら目の前に見えてきた門に一步踏み出した。

Unexpected Death and New Life (後書き)

さて、序章みたいなもので短めです。

勢いだけで書き出したものなので先の展開については自分でもよくわかっておりません。

どうなることやら……。

なぜわざわざ今落ち目のブリーチの二次創作なんざ書き出したんだろ……。

これも全部ハリベル様のおっぱいが悪いんだ。

けしからん。

ともかくわたくしの更新ペースは非常に遅筆です。

もう一話のストックを出したら次に更新はいつたい何時になるやら。

それでもお付き合いいただけるなら僕は小踊りして喜びますよ？

どうかよろしくお願い致します。

L o t t e r y I s A l w a y s W i t h M e (前書き)

思いの外長いです。
珍しいことです。

Lottery Is Always With Me

さて、知らない女性に刺殺されて、気がついたら週刊少年ジャンプのブリーチの世界でした。

という第二の人生 死後の世界な訳だけど が始まってから早十年。

僕は楽しく過ごしてます。

この十年色んな事がありました。

最初に尸魂界ソウル・ソサエティに来たときに当たった当たりくじ、なんでもあれば一定以上の霊力をもった人間の内、数十億分の一くらいの確率で当たるものならしく、お遊びで作った制度ではあるけど当選したのは僕が初めてなんだとか。

そのせいで真央霊術院に入学した時から周りから奇異の目で見られるわ、からかわれるわで悪い意味で目立ちまくってしまった。

けどまあそのおかげですぐに友人ができたし悪いことばかりでもなかったかな？

そんなこんなで六年の修了過程をのらりくらりと満了し、なんだかんだで卒業、晴れて死神となることができました。

それからは現役の死神として迫り来る虚ホロウをちぎっては投げ、ちぎっては投げの華麗な。

「蒼咲君、すまないがこれも頼むよ」

その声と共に僕の机の上に重い音を立てて山となった書類が追加された。

現実逃避の回想から引き戻され、大きなため息と共に今まで筆を走らせていた書類から手を置き、顔を上げる。

右には手つかずの書類の山、左には入稿済の山、そして正面には新たに追加された大山、僕が座る机の上には危ういバランスで保たれた紙の城が出来ている。

「……隊長おゝこれ以上は無理ですよおゝ」

書類の山のむこうに立つ長髪的美青年に泣きながら抗議する。

黒い死覇装に白い隊長羽織を身に付けたその青年は、普段は人のよさそうな微笑みを浮かべるその顔を申し訳なさそうに歪めている。

「いや、本当にすまない蒼咲君……でも他に頼れる人がいないんだ」
すまない、とまた謝る青年の名前は 『浮竹十四郎』。

護廷十三隊、十三番隊長その人だ。

因みに浮竹隊長が言っていた『蒼咲』ってのは僕の名前。

そーいえば今まで出てきてなかったかな？

『蒼咲紅音』あおざきあかね といいます、お見知りおきを。

現在は十三番隊、第九席を務めさせていただいています。

「いやいや……あれ？なんで僕ら二人しかないんですか？他の方々は？」

そう、僕が仕事を始めた時には他にも五人位はいたはずだ。

普段は多くの隊士が働いている隊舎の中、複数ある文机には持ち主の姿はなく、今は僕と浮竹隊長二人だけでガラんと静まり返っている。

「なんでも実家の両親が倒れたと知らせがあったとか、昨日食べた牡蠣にあたったとか色々と事情があるようだから先にあがって貰ったんだ」

逃げやがった！絶対嘘じゃねえか！

僕が現実逃避している間にそんなことになっているとは……。

窓の外に目を向けると陽の光は西に傾き、あといくらしもないうちに沈み始めてるだろう。

「そもそもなんでこんなに多いんですか？明らかに一隊に任せられる量じゃありませんよね？」

「それが……八番隊と十一番隊の分だね……溜まったものの一部と決裁直前の分をウチで預かることになってしまったんだよ」

申し訳ない、と浮竹隊長は頭を下げる。

隊長人が良過ぎますよ……、てか京楽隊長も鬼巖城隊長も仕事しろよ！鬼巖城隊長はまさか嫌がらせか！？

頭を抱えて大きなため息を吐いていると浮竹隊長がなにやら一枚の封筒を差し出してきた。

「海燕から君に、と預かっていたんだ」

嫌な予感がしつつも封筒を開け、中を確認する。

中身は一言だけ書かれた一枚の紙だけで、そこにはこう書かれていた。

『隊長にはくれぐれも無理させるなよ』

だったらお前も残れよボケエ！！

グシャグシャとその紙を丸め志波海燕三席の机に投げつける。

はぁ、とため息を吐きつつ横目で浮竹隊長を窺うと、たしかに朝に比べて幾分顔色が悪い。

「どうか手伝ってもらえないかな？お願いするよ、蒼咲君」

そう言つてまた申し訳なさそうな顔をする浮竹隊長。

お願いなら仕方ないですね……、と言いながらもう一度ため息を吐き、僕は席から立ち上がる。

「少し休憩しましょう、お茶を入れてきます、隊長もいかがですか？」

ありがとう頂くよ、と返事が返ってきたので僕は二人分のお茶を入れるべくたちあがった。

蒼咲君がお茶を入れに行ってくれたので俺も一息入れるとしよう。少し働いただけで調子を崩す身体を煩わしく思いつつ隊舎の隅にある休憩用の長椅子に腰をおろす。

軽く伸びをして身体をほぐし、お茶を待つ間、自分の机から持って

きたいくつかの紙片に目を通していく。

それは最近になって自分の隊に移動してきた彼、蒼咲紅音君の略歴が綴られたものだ。

見た目は二十歳前後、肩元まである青みがかった綺麗な黒髪に一見女性かと思紛う程に整った容姿、身長は170ほどと一般男性の平均くらいはあるのだが、細身な体型が彼をそれよりも小さく見せ、初めて彼に会う人物はその多くが勘違いをおこすことだろう。

容姿だけでも人目を引くが、更に『あの抽選』に当たって真央霊術院に入学した人物だ。

彼の事を知らない人物はこの瀟霊廷には少ないだろう。

俺も彼の名前や多少の噂位なら知っていたがそれだけだった。

でも死神になって三年や四年で移動になる事は、無いわけではないが珍しく、俺が知っていた噂の中ではそれだけ早く出世するほど優秀であるという話ではなかった。

そこで興味を持ち、真央霊術院時代の成績や前の隊での成果を調べてみたという訳だ。

結論から言うと、彼は変わり者ではあるが“非常に優秀”な人物であることが分かった。

真央霊術院時代では鬼道、白打、剣術、救護、隠密機動など非常に多くの専門授業に参加し、何れにおいても平均以上の成績を残し、しかし何れにおいても“特筆した”成績を残さなかった。

これが意図的なものだと気づいたのは卒業試験の結果だ。

彼は卒業試験を上から七番目の成績で通過した。

これは“全ての課題”で七番目の否、“六番目と七番目の間”の成績をとったことによる結果だ。

初めは気付かなかったが、気付いてみればあらゆる所でその傾向が見える。

彼が本気になればおそらくこの結果は大きく変わってくるだろう。

それこそ卒業まで六年もかけず、もしかすれば一年での卒業も可能だったかもしれない。

では何故彼はそうしなかったのか。

これは彼に会ってその人となりや多少は知った俺の予想だが、多分彼は本気で取り組む事をめんどくさがったか、目立ちたくなかったか、あるいはその両方だろう。

周囲の人間の成績を予想し、その間の成績を取る、というのも大変な労力だと思うがそこは遊びとして楽しんだのだろう。

そして卒業後に配属されたのが、なんと十三隊切つての戦闘集団十一番隊だ。

成績優秀者には各隊からの勧誘や本人の希望も多少は通る。

荒事とは無縁に見える彼にまさか勧誘が来るはずもないだろうと本人に聞いてみたところ、統学院への入学がクジで決まったのだからと友人たちがお遊びで作ったクジを引かされ、引き当てた十一番隊を希望することになった、と苦笑まじりで教えてくれた。

それを聞いたときには思わず笑ってしまったよ。

さて、その十一番隊での活躍だが、ここでも彼の優秀さが見て取れる。

彼は入隊して間もなく十八席に昇進し、二年が過ぎた頃には十席にまで登り詰めた。

これには当然、上の官職に死亡等の理由で空席が出来たことも含まれてのことだが、自身の実力がなければこうもトントン拍子にいくことはない。

それを裏付けるのは彼の戦績だ。

十一番隊に所属する間、際限なく繰り返される虚の討伐や、隊士同士の喧嘩や果し合いにおいて、撤退や敗北はするものの、只の一度も重症と呼べるほどの手傷を彼に負わせる事はなかった。

そこには当然上級席官との戦闘も含まれている。

それ以外でも十一番隊に任せられた事務関係の仕事　戦闘こそがこの隊の本分であるためその数は他の隊に比べて少ないが　をほぼ一人で行なっていたという。

これだけでも興味深いのが、それ以上に驚いた事件が二つある。

一つ目は未確認ではあるが単独で大虚を退けたという報告。

これは彼が仕官して一年が過ぎた頃、現世にて大規模な虚の殲滅に上級席官二名を含む八名であたった任務だった。

数十体の虚を倒し任務完了間近といった時に突然一体の大虚が現れたという。

救援要請を行なった時には既に当時の三席を含む三名が死亡、救援がたどり着いた時には既に大虚の姿はなく、更に二名が死亡、二名の重傷者と比較的軽傷な蒼咲君だけが残っていたそうだ。

任務の報告の際、彼が言うには二人を抱えて逃げ回っていたら帰ってしまった、などと今いち要領を得ない返答が返ってくるばかりで、生き残った二名も気を失っていたらしく何も覚えていなかったという事で有耶無耶になってしまったという件。

そして二つ目はい最近、この隊にくるきっかけとなった事件で、瀨霊廷に住む者なら多くの人間が知っている事件だろう。

事の発端は十一番隊隊長、鬼巖城が書類関係などの雑務を押しつけ、自らの隊に縛るために蒼咲君を副隊長に指名したことだった。

蒼咲君はこれをのりくらりと断り続け、遂に焦れた鬼巖城は力づくで従わせるといふ方法をとってしまった。

しかしここで蒼咲君は一つの提案を出す。

それは“鬼ごっこ”。

隊長と十席では実力に差がありすぎる、だからお互いフェアに、“正々堂々”とやり合いましょう。

ルールは簡単、鬼巖城が一撃を蒼咲君に入れること、期限は一日24時間、範囲は瀨霊廷内。

敗者は勝者の提案を必ず一つ呑む事。

そついう経緯で始まった鬼ごっこは瀨霊廷全域を巻き込み、街に多数の被害を出しながらも、毛ほどの傷も受けずに見事に逃げ切った蒼咲君の勝利におわる。

そこで提案されたのが別の隊への移動。

後日、多くの隊からの勧誘の中、またしても行われた“クジ”で選

ばれたのが我が隊というわけだ。

彼はつくづく“クジ”に縁があるみたいだね。

「……どうされたんですか？」

おっと、思い出してつい笑ってしまっていたら蒼咲君に見られてしまったか。

どうぞ、と差し出されたお茶にありがとう、と礼を言い、書類を脇に置いて一口啜る。

うん、美味しい、こういう所でも優秀なようだな。

彼も向かいの長椅子に腰掛け一口飲み、お互い一息つくくと彼は視線で書類について問うてくる。

うーん、正直に言ってみるか。

「これかい？……これは君の今までの略歴だよ」

そう言うで一瞬キョトンとした彼は、次に苦笑した。

「なんでまたそんなものを……どうせ碌なこと書かれてないでしょうにそんなの見ておもしろいですか？」

「いやいや、実に面白いよ」

いや、人の経歴を見て面白いと言うのは失礼だったかな？

「勝手に調べてしまって申し訳ないが、君は本当に興味深い」

「それは構いませんが……」

買いかぶりですよ、と彼は苦笑する。

この際だ、ちよつと踏み込んで聞いてみることにしよう。

「これらを見て思ったんだが……君は力を隠しているね？俺の予想では三席から副隊長……或いは隊長クラスの实力があるんじゃないかと見ているんだが？」

湯呑を持ち上げていた彼の手が止まる。

再び苦笑しながら一口啜り、彼の口が動く。

「それこそ買いかぶりですよ……そんなことをしていったい何になるんです？」

「それはわからないけど、そうでなければ大虚を倒すなんて事はできないだろう？」

「……………あれは逃げ回っていただけですよ、そうしたら呆れて帰ってくれただけです」

「重傷者二名を担いで？」

「……………ええ」

「十一番隊隊長を無傷で退けたのは？」

「退けたって……………時間一杯死にも狂いで走り回っただけですよ」

「現役の隊長相手に24時間だよ？」

「……………逃げるのは得意なんですよ」

ふむ、なかなか手強い……………動揺を見せたのは最初だけか。

お茶を一口ふくみ、彼を見る。

彼もまた苦笑を浮かべながら湯呑を傾ける。

仕方ない……………ここは一つ切り札を。

「なあ蒼咲君、お」

「あーかね　　！！」

「ブフオ！」

音もなく気配もなく、突然現れた人影が蒼咲君の後ろから抱きつき、それによって彼は盛大にお茶を吹きこぼした。

あれは熱そうだ。

……………しまった、つい尋問の様な事をしてしまった。

これではまるで彼を信用してないみたいじゃないか、これでは隊長失格と言われても仕方ない。

一つ大きいため息を吐き、過ちを未然に防ぎきつかけとなってくれた人物をみる。

肩口あたりまでの黒髪に浅黒い肌、死覇装とは違う刑軍服と隊長羽織に包まれた猫の様にしなやかな肢体。

その人物　　女性は、後ろから彼の首に手を回し、その背中に自らの豊かな母性の象徴を押し当て樂しげに彼の顔を覗き見ている。

彼女の名は『四楓院夜一』護廷十三隊二番隊隊長、隠密機動総司令官及び同第一分隊『刑軍』統括軍団長その人だ。

熱い!!

しかしまあ助かったのかな？

おかげで浮竹隊長の質問攻めから逃げられた。

まあ絶対に秘密にしておきたい訳じゃないから答えてもいいんだけど……後々面倒かもしれないね。

原作の流れはできるだけ変えたく無い、原作のメインキャラっぽい人たちのポジションをとっちゃったらどうなってしまうのか見当がつかないし。

「……四楓院様、こんな時間にどうしてここへ？というかこぼしたお茶を拭き取りたいので離れていただけませんか？」

後ろから抱きつかれているこ状態では、四楓院様のけしからんお胸様がこれでもかというほどに背中中に密着している。

正直変な気持ちになってしまっし恥ずかしいが、からかわれるだけなので内心の動揺は悟られぬよう努めて平静に声をかけた。

「むう、またそのような他人行儀な呼び方で呼びおって！夜一でよいと言っておるであらう」

「いえ……身分や立場というものがありますので……」

「わしが良いと言っておるのじゃ」

抗議する様に首に回す腕に力が入る。

苦しい上に胸が……。

「……夜一様、とりあえず離れてください……」

「むう、……今はそれで勘弁してやろう」

とやや不満げに言いながらようやく腕を解いて僕の隣に腰掛ける夜一様。

とりあえずこぼしたのを拭いて、夜一様の分も入れてくるか。

「四楓院、勝手に入ってこずにできれば一声かけてもらいたいな、びっくりするじゃないか」

夜一様と僕の分、そして浮竹隊長の湯呑にお茶を注ぎ直すと浮竹隊長が言った。

「お主も苗字で呼びおって……それはすまなかった以後気をつけよう」

全然こりてないな……まあ浮竹隊長も怒ってる訳じゃないからいいんだけど。

「そういえばどうしてここへこられたのですか？」

「直に時間じゃからのう、お主と遊ぼうと思つての」「夜一様がいたずらっぽいで僕を見る。」

外を見れば確かに日は沈みかけ、もうすぐ夜が訪れるだろう。

「しまったな……一休みのつもりが随分ゆっくりしてしまつたみたいだ」

確かにそうですねえ。

「そのことなんですが浮竹隊長、隊長の承認が必要な書類はどれくらい残ってますか？」

「……うん？それならもう残っていないよ、自分の分は自分でしっかりやらないといけないからな」

うん、さすが浮竹隊長どっかの誰かさんも見習っていたきたいねえ。

「なんじゃ、お主らまだ仕事が残っておったのか？そんなもの放っておいて今日は終いじゃ、紅音は今からわしに付き合っくんじゃからあんたもか……」。

「そういう訳にはいきません、明日にもどうせまた今日と同じような書類の山が届くんです、今ある分だけでも終わらせておかないといつか地獄を見ますからね」

「なんじゃ、お主わしには付き合えんと言つのか？」

「そういうわけではないですよ……仕事が」

「わしとの鬼ごっこはつまらぬと言うのか！」

「鬼ごっこをするつもりだったんですか！？もう夜ですよ？」

「あの山ブタとは一日中やっておったではないか！あの忌々しいブタめ」

ブタって鬼巖城隊長か？まあ確かにデブいけど。

「あれは訳あつてですねえ」

「知っておるわ！それで隊を移したのであるう？わしの誘いを断わりおつて！」

移動先はクジで決まったんですもん……てかあのクジには合意してたじゃないですか。

困つたなあ……。

「こらこら、四楓院、あんまり蒼咲君を困らせないでやってくれな
いか？」

と、今までのやりとりを笑って見ていた浮竹隊長が助け舟を出して
くれた。

「仕事があるのは本当なんだ、これは俺の責任でもある、すまない
が後日に改めてもらえないだろうか？」

さすが十三隊の良心、人間出来てますね。

「お願いします夜一様、後日必ず埋め合わせしますから」
僕からも改めてお願いする。

「むう、絶対じゃぞ！約束じゃ！」

なんとか夜一様も納得してくれたようだ。
夜一様と小指をつなぎ約束を交わす。

その時に見せた夜一様の楽しげな笑みはとても魅力的だった。

「……さて、じゃあ仕事に取り掛かるとするか、四楓院も手伝って
くれるか？」

「馬鹿を申すな、わしは帰って碎蜂を連れて飯でも食いにいくさ」
さて、話も一段落出来たし働きますか……と、その前に。

「そのことですが、隊長も今日はあがって下さい、後は僕が片付け

ますんで」

「……………はあ？」

長椅子から立ち上がりかけた姿勢のまま浮竹隊長はポカンとした表情で言う。

「いやいや、蒼咲君一人に負担をかけるわけにいかないよ」

「調子、大分悪くなってますよね？顔色が悪いですよ？」

浮竹隊長は病のせいで体が弱い、今も平静を保とうとしているがその顔色はすぐれない。

「しかし」

「大丈夫ですよ慣れてますから、それに隊長に何かあると僕が隊のみんなに殺されちゃいますよ、だから今日は帰ってゆっくり休んで下さい、お願いです」

僕がそう言っても、まだ何か言おうとする浮竹隊長の肩を夜一様が叩く。

「隊長想いの部下の願いくらい聞いてやれ、お主に倒れられて苦勞するのはお主だけではないんじゃない？」

「……………ふう、わかった……………蒼咲君のお願いなら仕方ないな、その代わり君も無理をするなよ？」

「わかってますよ、明日からは他の隊員にも仕事するように言うて下さいよ？」

了解だ、と苦笑しながら浮竹隊長は席から立ち上がる。

僕も立ち上がり、懐から取り出した髪留めで前髪を纏め、気合を入れる。

多分徹夜になるなあ。

「ハハハ、そうすると本当に女子の様じゃのう」

ほっといてくれ、いつそバツサリ髪も切るかなあ。

「それじゃあ、隊長お疲れ様です、ゆっくり休んで下さいね？夜一様もお疲れ様です、後日必ず埋め合わせしますので」

「ああ、お疲れ様、すまないがよろしく頼む、くれぐれも無理はないようにな」

「そうじゃ、倒れられては遊べぬからのう、ではまたのう」
二人が退室したのを確認し、首を鳴らして自分の机に向かう。
さて、人踏ん張りしますか。

その後、紙の城を完全に攻略完了したのは東から眩い朝日が登るの
とほぼ同時だった。

Lottery Is Always With Me (後書き)

更新が早いつて？

この分は書置きしていたのさ！

だから次の話もすぐ更新されると思ったら大間違いだ！

すいません調子に乗りました。

そんなこんなで第二話です。

原作の過去編からスタートしております。

色んなキャラと絡ませていきたいんだけどどうなることやら。

基本的にほんわかしたゆるーい話で私の妄想を垂れ流していこうと思っ
ていますのでよろしくお願いします。

D i s a p p e a r e d C a t s T a i l p a r t . A (前書き)

ケータイで週間アクセス順に並べ替えてみたら一ページ目にコレが出てきてカルピス吹いた。

走る。

跳ぶ。

いつの頃からか見慣れてしまった瀟靈廷の街並み、その建物の屋根から屋根へと駆け抜ける。

「夜一様〜！どこですかあ〜！」

仕事を抜け出した夜一様を探すため、僕は今日も飛び回ってます。

風を切りながら走る今の僕の格好は死覇装ではなく刑軍服。

ただいまの肩書きは二番隊隠密機動第一分隊刑軍所属の第八席となっております。

が、実質夜一様の世話役みたいな感じで、今日も今日とて碎蜂さんと二手に別れて夜一様を捜索中です。

はい、また隊を移動しました。

つい二ヶ月程前のことです。

その時は十三番隊で二年をすごし、仕事も隊員たちとの関係も円滑に進むようになり、浮竹隊長からは「志波か蒼咲かどっちか副隊長になってくれないか？」などと言われ始めた頃。

またいくつかの隊からの勧誘が再発し、またしても僕の意思を無視したくじ引きの結果、今に至るといわけです……。

まあ別にいいけど……これ以降は長くとも二年くらいの周期で隊移動のくじをするって誰が決めたんですか？僕は一切聞いてないですよ？

さて、うだうだしてもしかたがない、そんなわけで夜一様の捜索です。

さすが『瞬神』と言うべきか夜一様の逃げ足はピカイチです。

気配の消し方もさすがと言うべきか気がついたら見失うなんてことは日常茶飯事、そのおかげで二番隊に配属されて夜一様に付き従うようになってからまともに仕事ができてません。

逃げ出さないと思ったら今度はじゃれて纏わりつかれてお胸様を当ててくるわでとてもじゃないけど集中なんて出来ないですよ。本人はとても優秀な方なんです。猫の血がそうさせるのかとてつもなく気まぐれです。

ため息を吐きながらも周囲に気を配り、走り回っていると多くの死神の方たちがこつちを指さして笑ってたり手を振ってきたりしています。

自分で言うのもなんですが、最近ではこの夜一様とのかくれんぼも半ば名物と化してしまっているので非常に目立ってしまっています。恥ずかしいです。

適当に手を振り返しながらそそくさと走り去ります。

……ていうかよく考えたら隠密機動が目立つちゃダメだろ。

……気配消せよ僕、もう今更遅いけど……。

「おゝい、蒼咲いゝ」

盛大なミスにため息を吐いていると名前を呼ばれた。

「こつちやこつち、ちよいと茶でもどうやゝ？」

立ち止まって下を見ると長いストレートの金髪の男性がこつちに軽く手を振っている。

「平子隊長……と六車隊長に志波さん、ご無沙汰してます、皆さんサボリですか？」

屋根から飛び降りるとそこにはその三人が茶屋の前で集まっていた。

「バカ、お前んとこの姫さんと一緒にすんな、今月の滯霊廷通信配つてんだよ」

と、ノースリーブの死覇装の九番隊長『六車拳西』。

「俺は、平子隊長に渡すもんがあったからな」

これは黒髪のイケメン十三番隊第三席『志波海燕』。

「オレは散歩や、昼時やし飯どこで食おうかとなあ、都合よう集まつたしお前もどうや？」

そして腰まである長い金髪の五番隊長『平子真子』。

確かに平子隊長の言うとおり、日は中天に近くそろそろ昼休憩の時

間だろう。

「そうですね……」

「また姫さん追いかけてんねやる？ここらで腹ごしらえしとかんと何も食わんまま日が暮れるぞ？」

確かに、と思うと腹が空腹を主張しだした。

「ハハ、決まりだな、おら行くぞ」

「……では、あまり長居はできませんがお言葉に甘えて」

「……なんやその言い方やったらオレが奢るみたいやないか、奢らへんぞ？」

「何言つてんすかやっぱここは言い出しっぺの平子隊長のおごりですよ？」

「だな、配達途中だったのに付き合っただけでやるってんだ当然だろ」

「ご馳走になります」

「……お前ら……しゃあないのう、ほな安いとこいくで」

安いところと言った平子隊長にブーイングしながら僕たちは食事に向かった。

そして昼食、今日初めてお腹に入れるエネルギーに思わずほっこりしています。

「……遠慮ない奴らやのう」

「んなもんお前相手ににするかよ」

「奢りつすもんね」

「ぱくぱく、モグモグ」

四人がけのテーブルの上、所狭しと並べられた料理は、いくら安い店と言ってもそれなりに値ははることでしょ。

まあ僕のお金じゃないしいいよね。

通りがかった店員に六車隊長が声をかけた。

「おい、餃子とエビチリ四人前ずつ追加で」

「まだ食う気かい！てか蒼咲イ！お前も黙々とどんだけ食うとんね

ん！」

「ふお！？」

平子隊長に頭を叩かれ、思わず吹きこぼしそうになってしまった。

「何するんですか平子隊長、びっくりするじゃないですか」

「びっくりするんはこっちや！見かけによらずえらい大食いやのう

ピースちやうわアホ！」

褒められたのでVサインしてみたらまた叩かれた。

「ハハハ、蒼咲は結構食いますからねえ、奢りとなると余計に」

食べるのが好きなんですよね、それに今日は朝から何も食べてないから余計にね？

「まったく、どこにそんだけの量が入るんだか、まあ遠慮せずにガンガン食べ」

六車隊長が呆れたように言いながら、新たに追加された料理に箸を伸ばす。

「うーす、遠慮なくご馳走になります」

志波さんも笑いながら箸を進める。

「おま 拳西！何を煽つとんねん！誰が金払うと思とんや！」

「「「平子隊長（真子）」」」

「やかましいわー！！」

平子隊長のツッコミが賑やかな店内に響いた。

「ありがとうございますました〜！」

店員さんの元気な声に見送られ、僕たち四人は店を後にする。

「平子隊長御馳走様でした、お腹いっぱいです」

「ご馳走様っす隊長」

「ごっそさん」

三人で満足した顔で平子隊長に礼を言う。

「かぁ〜そらぁあんだけ食やぁ腹いっぱいになるやろっなぁ！えらい目におうたわ……」

対する平子隊長は涙目だ。

「別にそんな気にするほどの額じゃねえだろ、なんか金使ったのか？」

まあ確かに隊長職の給料から考えたらそこまで神経質になる値段ではなかったはずだけど。

「オレのこの髪を維持すんのにはいらい手間と金がかかるんや」

そう言つて手櫛で髪をいじる平子隊長。

髪ですか……確かに綺麗な髪ですけど……。

「切っちゃえばいいじゃないかそんなもん」

僕の気持ちを代弁してくれた志波さん、気持ちはわかりますけどそんなもんつて言つのはどうなんですかそれ。

「おま、えらい事言つてくれたな……オレのトレードマークやぞ」
案の定キレ気味です。

そうやってやいのやいの言い出す二人。

こうやって騒いでいると。

「……目立ちますねえ」

露骨な視線は少ないが、こちらを伺っている気配がかなりある。

「まあ隊長格二人に志波さんですもんねえ」

「いや、お前だろ」

え？僕？六車隊長は呆れた様にこちらを見ている。

「白昼堂々出歩く隠密機動なんてフツーいねえよ」

「やっぱそうですよね……目立ちますか」

改めて自分の姿を見て、そして考えの至らなさにガツクリくる。

「それだけでなくも有名なんだからよ」

「そつや！」

平子隊長が相槌を入れる。

見ればその長い髪の毛で志波さんの首を締め上げていた。

いや、大事なトレードマークなんでしょ？

そんな使い方がいいんですか？

「そもそも二番隊 隠密機動への移動つてのがまずありえへん、

あつこはほぼ独立した部隊やぞ？機密にも関わる、隊長格になるつてならまだしも高々八席での移動なんかオレは聞いた事あらへん、だからはようちに来い」

へえ、そんなもんなんですかねえ、てか最後のは関係ないでしょ。

「それならうちが先だ、近々瀨霊廷通信でお前の特集と写真集出すつもりなんだからよお」

「そういえば六車隊長が編集やってるんですけどね、言っちゃ悪いんですけど似合わないっすねえ」

復活した志波さんも話に加わる。

「ほつとけ、代々九番隊がしきつてんだ仕方ねえだろ」

いやいや、確かに似合わないですけどそれよりも。

「ちよ、ちよつと、特集だの写真集だのどついうことですか？初耳ですよそれ」

「言つてないからな、悪いが拒否権はねえ、女性死神協会と一部男連中からの要望でな」

ま、マジですか勘弁してくださいよ……。

「なんやあ写真集くらい、オレや拳西だけやなし、有名どころは大抵やつとんやから問題ないやろ」

「それに女性死神協会に至つては理事長直々にゴーサイン出てんだ、逃げ場なんてねえぞ？」

女性死神協会理事長と言えば 卯ノ花隊長か……それは逃げられないですね。

「いやあ〜蒼咲君モテるねえ〜羨ましいねえ〜」

志波さん、馬鹿にしてるでしょ？人事だからって面白がつて……。

「そうか羨ましいか、お前の分も要望来てるからすぐに実現させてやる、楽しみにしてるよ？」

「げえ〜、マジですか……」

ざまあみろつてやつですね。

「まあなんにせよ」

「拳西〜！」

六車隊長の声を遮り、ぼやぼやした感じの女性がやってきた。

「白か、どうした？」

「どうしたじゃないよ！拳西つてば配達に行ったつきりなかなか帰ってこないからまたサボってるのかと探しに来たの！」

「またつて、俺はサボったことなんかね」

「ああ！ご飯の匂いがする！ずるいずるい白もご飯食べてないのに！白もご飯食べた！い！」

「いや、おま」

「あ！あかねちゃん！やつほ！ひさしぶり！」

「……………」

「……………どうも、白さんお久しぶりです」

完全に自分のペースをひた走る女性は九番隊副隊長『久南白』。

ちよつと、六車隊長、抑えてくださいつてば。

今にも殴りかかりそうな六車隊長は志波さんが後ろから羽交い締めにして止めている。

「あかねちゃんもご飯食べたの？ずるい！」

そう言いながら地面に転がって駄々をこね出す白副隊長。

子供か。

「やめんか白！ガキじゃなえんだから！」

更にキレだす六車隊長。

平子隊長も笑つてないで止めて下さいよ。

誰かこの空気を止めてくれ。

「平子隊長」

その声を聞いたとき、僕の体は思わず動きを止めてしまった。

「おお、なんや藍染もどないしたんや」

「どうしたじゃないですよ、休憩に出たきり帰ってこないで……探しましたよ、まだ仕事が残ってるんですから」

僕はゆっくりと振り向き、平子隊長が声をかけた方向を見る。

そこには人のよさそうな顔に眼鏡をかけた青年がいた。

これから起こる全ての元凶、そして今は護廷十三隊五番隊副隊長『藍染惣右介』だ。

いや、もしかしたらここにいるのは彼ではないかもしれない。僕にはもうそれすらもわからない。

なぜなら僕は“彼の斬魄刀解放を見てしまっている”からだ。

「まったく、こんなところで各隊の主要人物を集めて……」

「やいやい言いなや、お前はオレのおかんか」

「とにかく早く戻りましょう、皆さんも……おや？君は……」

そう言いながら周りの人に申し訳なさそうな目を向けていた視線が僕に向けられて止まる。

「蒼咲紅音君……だったかな？噂は色々聞いていたけど実際に会うのはとても久しぶりだね、統学院の授業以来だから六年ぶりくらいかな？」

「お久しぶりです藍染副隊長、覚えて頂けていたようでありがとうございます」

「君は優秀な生徒だったからね、悟られないよう隠していたみたいだけど……ああも露骨だと……ね？」

そう、真央霊術院では現役の死神が受け持つ授業もあるのだ。

藍染 やっぱり敵って認識が出来てしまっているのか呼び捨て

もその講師の一人で、自分の授業を持っていた。

僕は彼の能力を知っていたので真央霊術院で学ぶ間、彼には関わらないようその授業は全てサボっていた。

でも、ある時半分寝ながら授業開始を待っているとその授業を担当する講師がなかなか来なかった。

これ幸いと机に突っ伏して寝ていると次に目を覚ました時、教壇には藍染が立っていた。

半ばパニックになりながら隣の席の人間に聞くと、腰痛で倒れた講師に代わり急遽藍染が授業を行うこととなったらしい。

しかもよりによってその授業の内容が、斬術の座学『斬魄刀の不思議

議々其の四々解放時における斬魄刀の能力と使用者の精神の類似性、及びそれから考えられる使用者の内なる願望、人間性の考察（相性占いもあるよ！）」だった。

それを聞いて慌てて適当な理由を並べて逃げようとするも全て却下され、あれよあれよと言う間に見本ということで藍染は自身の斬魄刀『鏡花水月』を解放。

その時は思わず悲鳴を上げてしまい、周りからは変な目で見られ、今更になって疲れているなら保健室で休みなさいとも言われてしまった。

そんなこんなで僕も鏡花水月の能力『完全催眠』の虜になってしまったという訳です。

それ以降は逆に開き直って普通に藍染の授業も受ける様になったんだけど、いやあこの人の授業は解りやすいし面白いんで授業中はついつい悪者って事を忘れて真面目に勉強してしまいましたよ。

それはさて置き、やつぱ悪い奴ですので卒業以降はまた会わないように気を付けました。

不振に思われてないといいんだけど……。

「別に隠してた訳じゃ……そんなにへタでしたか？」

「いや、そういうわけじゃ……」

「へタやのう」

「へタだな」

「へタつび！」

「まあ隠してるのはバレバレだな」

といつの間にもやら話を聞いていた他の方々からも厳しい一言。あれえ？

「そのへんの下っ端ならともかく上位の死神の目は騙せへんぞ」

「上のモンを舐めすぎだ」

「抑えてる霊圧も漏れちゃってるしねえ」

「実際に会うとイッパツだな」

「もう少しなんですけどねえ」

「……勉強させていただきます」

「なんだか泣きたくなって来た。」

「よってたかつていじめないで下さいよ……。」

「で、そういえばここでうだうだしていても仕方ない、夜一様を探さないで。」

「すみません、僕はそろそろ夜一様を探しに行かないといけませんので」

「ああ、そうですね、今は二番隊にいるんですけどね、大変でしょうけど頑張つて下さいね、隊長もそろそろ隊舎に戻りましょう」

「しゃあないのう、ほなまた、たまには遊びに来いな」

「ええ、今日は御馳走様でした平子隊長」

「そう言つて手を振つて去つて行く平子隊長と軽く頭を下げたそれに付いていく藍染。」

「俺らも行くか、じゃあな、瀨霊廷通信の件はまた本決まりになったら伝えに行くからよ……一応言つとくが逃げるなよ？無駄だから」

「ええ、もういくの、白もつと遊びたい、ご飯食べたい、！」

「うるせえ！行くぞ！」

「お疲れ様です……その件は流れてくれる事を祈つてます……無駄でしょうけど」

「軽く手を上げ、まだブーブー駄々をこねる白副隊長を引きずりながら歩いていく六車隊長。」

「それじゃあ俺も行くか、お前がいなくなったせいでウチも結構困つてるんだぜ？浮竹隊長は俺に副隊長になれて更にしつこく行つてくる様になつたしな」

「なつたらいいじゃないですか、適任ですよ？」

「てめえ、自分は絶対断るくせに人には進めるのかよ」

「僕はその器じゃないですからねえ、カツコイですよ志波副隊長」

「お前は……まあいい、まあたまにはウチの隊にも顔見せに来いよ？みんな喜ぶからよ」

「わかりました、近いうちにお土産持つて伺います」

「おう、ああ……あとまた俺の家にも遊びに来い、妹が会いたがつてんだ」

「妹……空鶴さんですか？」

「ああ、お前に惚れたんかねえ、次はいつ来るんだつてうるさくつてよー」

「いやいや、それはないでしょ」

「ハハハ、とにかく俺の『弟』になるかもしれないんだけども気楽に来いよ？じゃあまたな」

そう言つて笑いながら走り去つて行く志波さん。

弟つて、話が飛びすぎでしょ、空鶴さんとはまだ数えるほどしか会つた事ないんだからそんなはずないでしょうに。

さて、僕もそろそろ探しに行きますかね。

大分時間をくつてしまった、そろそろ隊舎に戻つてきてるかもしれないなあ。

とりあえず一度戻つて見るか、碎蜂さんが見つけてるかもしれないし。

そうして僕もその場から飛び上がり、屋根伝いに風を切つて走りだした。

どうもお久しぶりです。

まずはここまで読んで頂いてありがとうございます。

どうやらたくさんの方が私の駄文に目を通して下さっているようで
ほんともうなんかすいません。

あれですかね、あらすじの所に書かれた『ハリベル様のおっぱい』
って言葉に釣られてしまったんですかね？

嬉しい限りです。

ハリベル様さすがの求心力です。

ほんと申し訳ないです。

感想も頂くことができ、私舞い上がっております。

ホントうれしいものです。

期待してますとか言われてしまったら思わずニヤニヤしてしまいま
す。

ウザイですね、申し訳ないです。

さて私は、一つのお話は一話で区切る。

というつもりで書いていこうと思っていたんですがダラダラと書い
ていくうちに思ったより長くなってしまいました中程で区切って前
後編ということにさせていただきました。
後編は近いうちに上げさせていただきます。

私の妄想にお付き合いいただける方がいて、暇つぶしになった、と
思っていただけなのなら幸いです。

それではそんな素敵な方々は次回もよろしくお願い致します。

一旦隊舎に戻って見たものの、やっぱり夜一様は居なかった。碎蜂さんも帰ってきてないみたいだし一体どこで何をしているのやら。

どうしたもんかと思っていると向こうから見覚えのある人物が歩いて来た。

「あれ、蒼咲サンじゃないですかどうしたんです？こんなところでヘラヘラした感じで声をかけてきたのは浦原商店の怪しい店長

ではなく、今は二番隊第三席隠密機動第三分隊檻理隊部隊長『浦原喜助』さんだった。

「どうも浦原さん、いやあまた夜一様を見失ってしまいましたね？もしかしたらもう帰ってきているのでは、と思っで隊舎に戻ってみたんですけど……まだみたいです」

「ハハハ、またですかいつもご苦労様ですねえ」

「浦原さんからもなんとか言っで頂けないですか？夜一様とは古くからの友人なんですよね？」

「いやいや、ボクが言っでも聞いてくれる人ではないですからねえ、それこそキミが言ったほうが効果あると思いますよ？なんてったっで夜一サンの一番のお気に入りですからねえ」

「それこそ効果ないですよ……」

「あ、と思わすため息が漏れてしまっ。

真面目に働いて下さい、と言っでみたことも一度や二度ではないのだ。

「さて、ここで待っでも仕方ないのもうっ走りしてきますか？頑張っで下さいね」

「あ、そういえば夜一様の行きそうな所に心当たりないですか？甘味処とかは全部回ったんですけど……」

「そうですねえ……あ……いや、むっ……」

何か心当たりがあったのか一つ手を打つ浦原さん、しかし何か考えているようで小さく唸ってみせた。

「どうかしましたか？」

「いえ、心当たりはあるんですが……まあ蒼咲サンならいいですかね？夜一サンも許してくれるでしょう」

そう一人で勝手に納得し、浦原さんはその心当たりのある場所を教えしてくれた。

「絶対に秘密ですよ？そこはですねえ」

そして、僕はまた走る。

向かう先は瀟霊廷のほぼ中心、懺罪宮とかの色々と重要な建物が建ち並ぶ区画の隣、双極の丘の麓。

「勉強部屋かあ……そういえばあったなそんなのも、すっかり忘れてたよ」

そう独り言を呟いていると双極が見えてきた。
デカイ。

これで朽木ルキアが処刑されそうになるんだよなあ。

まあそれもだいぶ先の話、今は原作開始のはるか過去、朽木家の若様 朽木白哉様もまだ子供だし、ルキアに至ってはこの時代にいるのかどうかもわかんないからね。

しかし、過去編の話もいつぐらいから始まるんだろうか。

たしかローズこと『鳳橋楼十郎』さんが三番隊長になって二年後、浦原喜助さんが十二番隊長に就任してからだったよなあ。

そう考えるといつなんだろう？

鳳橋さんは七番隊の『愛川羅武』隊長の所で副隊長やってるしなあ。そもそも……。

僕はどうしたいんだろうか？

どう関わるべきなのか？

はたまた関わっていいものだろうか？

うーん、……と着いちちゃったか。

物思いにふけつているとそこは双極の丘の麓。

そこに巧妙に隠された小さな洞窟の様な所に入る。

その中に普段なら隠されているのであろう地下への入口があった。

それが開いているということはやっぱり夜一様はここに来ているみたいだ。

地下へと下りるために長い長い梯子を下る。

地下に降り立ち、周りを見渡してみると冗談の様に広い。

というか普通に明るいんだけどどうなってるんだろうか。

そうやってきよるきよると視線を動かしていても肝心の夜一様が見当たらない。

あれ？やっぱりここにはいないのかな？とりあえず探してみるか。

大小様々な岩の起伏があり、これぞ修行場というべき閑散とした勉強部屋を歩き始める。

こういう場所ならどこにでも隠れられそうだなあ、と、あれは……。

「……夜一様、起きてください」

大きな岩のテーブルの上、猫の様に丸くなって寝息をたてる夜一様を見つけた。

「夜一様、こんな所で寝ていると風邪ひきますよ？」

呼びかけても返事がないので夜一様のそばに跪き、ゆっくりとその肩をゆすってみる。

「うーん、……あかねか？どうしてここにおる？」

まだ半分夢の中なのだろう、普段とは違う舌足らずな口調で問い、猫の様に右腕でクシクシと顔を洗う夜一様。

「浦原さんに教えていただきました。二人の秘密の場所に立ち入っ

てしまい申し訳ありません」

「ふわぁ……………ん、構わん、そのうちお主も連れてきてやること
思っていたしのう」

大きく一つ欠伸をされるといつもの夜一様に戻る。

ちよつと残念ですね？

「して、今の時間はどれくらいじゃ？」

「昼も過ぎてもうすぐ夕暮れです、……………今日も一日中探しまわりま
したよ、おかげで仕事は放ったらかしです」

「そう怒るな、いつものことではないか」

「いつものことだから困るんですよ……………」

「違う、と言つて笑う夜一様。」

そして軽々と飛び起き、大きく伸びをしてこちらを振り向く。

「さて紅音よ、この場に訪れたのも何かの縁、折角の機会じゃ……………
構えよ」

……………え？

「お主の力がどれほどのものか見てみたくてのう、何ここには誰も
おらぬ、存分に奮つてみせよ」

夜一様……………突然何を。

「いえ、そんなことより仕事が」

「直に夕暮れなのじゃろう？だったら今日は終いではないか」

「ですが」

「そうじゃのう、ではお主が儂に勝てれば明日からはお主の言つこ
とを聞いてやるうではないか」

いや、勝てるわけないじゃないですか。

「さぁ、構えよ」

何故かやる気満々の夜一様、僕は一言も了承してないのに……………。

「……………これは命令という訳ですかね？」

「何を言つておる、儂がこんなところでお主に命令などするものか、
これはお願いじゃ、儂の寝起きの運動に付き合ってくれぬか？」

「……………お願いなら仕方ないですねえ」

はあ、と一つ重い溜息を吐き、後ろに下がって夜一様と距離をおく。まだまだ言いたいことはあるし、やりたくはないけど夜一様の気まぐれはいつものことだし、仕方ないと割り切るしかないか。断るとあとが面倒だし、……慣れてしまったのかなあ。

「ん？お主斬魄刀は使わぬつもりか？」

「はい、ダメでしょうか？」

僕は、斬魄刀を地面に置きながら問う。

「お主の斬魄刀は風を操ると聞く、どのようなものか一度見ておきたかったのだが……それを使わずとも儂に勝てるという余裕か？」

そう、僕の斬魄刀の能力は風を操る、“そう思われている”。

今まではそういう使い方しかしなかったからその認識が広がっているみたいだ。

「そういうつもりではありませんよ、歴代最強と名高い夜一様に自分の白打がどこまで通用するのか、一つ胸をお借りしたいと思いません」

「ほう、胸か、そんなものお主にならいつでも」

「そういう意味じゃないですから！」

そう言っていたはずらっぽく自分の胸を持ち上げる夜一様。

絶対からかってますよね？

ともかく深く息を吸い、気を取り直して半身に構える。

「では、改めてよろしくお願いします」

「うむ、お主が負けたら儂の言うことを一つ聞いてもらおうからの？」

「え？ちよ……聞いてな」

抗議の声を最後まで言えないまま、夜一様の姿が消える。

「っ！？」

頭上からの殺気に反応し、大きく前に跳躍、振り返ると一瞬前まで僕の頭があつた場所に夜一様の右の踵が通り過ぎた。

空を切った踵が大地を割る。

だが次の瞬間には僕の背後、鋭い左の蹴りが僕の首を刈りとらんと迫る。

頭を下げた回避、お返しとばかりに放った左後ろ回し蹴りに対し、夜一様は空振った蹴りの勢いのまま身体を回転、軸足を入れ替えて右の蹴りを繰り出す。

お互いの蹴りがぶつかり打撃音が響く。

「ふむ、いい反応じゃ」

「……ありがとうございます」

お互いに蹴りを放った姿勢のまま、視線を合わせ言葉を交わす。示し合わせたかの様に僕たちは同時に間合いを開けた。そして、再びぶつかる。

10mや20m程度の距離など夜一様にとってはゼロに等しい。

瞬く間に間合いを詰められて放たれるのは上下左右前後あらゆる角度から迫る流れるような連撃。

拳撃を。

蹴撃を。

投撃を。

受け。

捌き。

躲す。

楽しそうに笑う夜一様に対して、僕にはあまり余裕がありません。それは、実力の差以上に僕たちの間に広がるもの、経験の差のせいでしょう。

僕にはまだ0からMAXまで自分の力をコントロール出来るほどの戦闘経験が無い。

要するに一速、二速、三速……と順々にシフトアップしていくタイムラグがある訳です。

夜一様はおそらくそれも分かっているんでしょう。

十分すぎるほど、手加減してくれています。

これくらいならついてこれるか？

これは防げるか？

とでも言うように徐々に徐々に攻撃は鋭く、苛烈になっていって

ます。

初めの頃は防戦一方、いくつか捌ききれずに食らってしまいました。が、今は段々と身体に熱が入ってきて、反撃を繰り出せるようになってきました。

それでもまだまだ足りない、届かない。

遊ばれている、と感じます。

夜一様は常に余裕の笑みを浮かべ、その体には未だ僕の拳は届いていません。

試されている、と思います。

攻防は全て夜一様のペース、戦いの流れは僕の手の中にはありません。

それが少し悔しい。

勝てるとは思っていないけれど、すべて手のひらの上というのは情けない。

せめて一矢報いたい。

だからまずは自分のペースを取り戻す！

目前に迫った左拳、それを紙一重で左に躲す。

素早くその腕を掴み、背負い投げの要領で強引に夜一様を投げた。

ダメージなんて狙ってなかったから当然だけど、身体を捻りながら一回転して危なげなく着地する夜一様。

それでいい、間合いは稼げたんだから。

ギアをトップへ、霊圧を高め、意識を切り替える。

そして夜一様が動き始めるよりも早く、僕が先に動く。

『瞬歩』。

死神が扱う高速移動術。

この場ではお互いまだ使っていないかったけど先に使わせてもらおう。

夜一様の背後を取り、ほんの少しだけタイミングをずらして振り下ろしの拳打を放つ。

繰り出した拳は先程まで夜一様がいた空間を切り裂き、そのまま振り抜かれた拳が大地を割った。

普通に攻撃しても余裕で躲されたらうけどこれは合図。

僕は本気でいきます、改めてよろしくお願いします、って感じで。見ればそれが伝わったのか、40m程離れた位置で振り返った夜一様は先程までより更に笑みを濃くし、頷きました。

あれは肉食獣の笑みです、ちよつとだけ後悔しました。

そして夜一様の姿が消える。

ここからは瞬歩も交えた高速戦闘、それに流れを自分に持ってこななければいけないんだ、自分から攻める！

僕も瞬歩で追う、幾つものフェイントを混ぜながら迫って来た夜一様の右拳に僕も右で応える。

快音が響き、ぶつかりあつた拳が痛みと共に痺れた。

間髪入れずに左の蹴撃。

これには身体を回転させて放たれた右の回し蹴りで打ち返された。

弾かれて距離が開くが瞬歩で移動、裏を取る 後ろか！？

背後からの足払いを跳んで交わし、振り向きざまに空中で左の蹴りを放つも頭を下げて躲される。

そしてまた夜一様は瞬歩を発動する。

やっぱり夜一様は速い。

さすが『瞬神』、僕も瞬歩には自信があつただけどなかなか追いつけない。

それでも見えてないわけじゃないから闘える。

大地を、空中を駆け抜け、僕たちは何度も何度もぶつかり合う。

拳と拳が、蹴りと蹴りが激突するたび音が大気を震わせ、大地を揺らす。

打撃の衝撃が手足を伝って脳に響き、何とも言えない感覚が生まれる。

重力から解放されたかの様に縦横無尽に駆け抜け、拳打の一つ一つに必倒の意思を込めて放つ。

少しでも気を緩めれば即座に地を舐めることになりそうだ。

拳撃の応酬のさなか、ふと夜一様と視線がかち合う。

獣の様に獰猛で少女の様に純心な笑みを浮かべ、夜一様はこの状況を心底楽しんでいる。

多分僕の顔も笑みの形をつくっているんだろうなあ。

この場にいるのは僕たち二人。

僕に応じるのが夜一様なら、夜一様に応えるのも僕しかない。

だから僕は思う。

より速く。

より遠く。

より強く。

より鋭く。

この二人だけの空間をより長く続ける為に。

そして二人同時に大地を蹴る。

遠く離れた彼我の距離は瞬歩によって瞬く間にゼロへ。

もう何度目になるかわからない拳撃の交差。

僕の胸辺りを狙った夜一様の右の拳打を内から外へといなし、体勢

の崩れたところへ右の蹴りを放つ。

こめかみへと吸い込まれていくかに見えた僕の蹴撃は間に滑り込ま

せた左腕で受け止められた。

「……っ!?」

そのまま足を取られて引き寄せられ、軽く飛びながら放たれる右の蹴撃。

防いだ左腕が痺れる。

「ハアッ!!」

だがそれだけでは終わらなかつた。

裂帛の気合と共に、右の勢いを殺さず空中で一回転して放たれた追

撃の蹴撃は先の一撃より遥かに重い。

左腕から鈍い音が響き、防ぎ切れずに吹き飛ばされる。

「……続けるかのう?」

霊子を固めて空中に足場を作り、それでも勢いを殺し切れずに空中を滑りながら体制を立て直した僕に夜一様の声がふってくる。

「……当然です」

僕はまだ一撃も有効打を当てていない。

このままでは終われない、終わりたくない。

這いつくばった姿勢から立ち上がると、左腕から痛みが走る。

折れてるなあ、少なくともヒビは入っているだろう。

そう改めて認識すると痛みが汗が吹き出す。

でもこれは証だ、夜一様の手加減しそこねたという証。

それくらいは僕が追い詰めることが出来たということだ。

だからもう少し続けたい。

もう少しで手が届きそうなんだから。

「……もう少しだけお付き合いください」

左腕は力が入らないのでダラリと下げたままだが、再び構えをとり

夜一様と相對する。

それを聞いた夜一様は更に楽しそうに「応」とだけこたえ、構えを

取る。

よかった、もう終わりだと言われてしまうかと思ったから。

始めた頃とは逆に僕の方に付き合ってくれる夜一様に感謝しつつ僕

は走る。

止まってしまった二人の空間を取り戻す為に。

もう少しだけこの二人の時間を続ける為に。

夜一様は楽しそうに。

僕も同じように顔に笑みの形を作りながら。

僕の中の奥深く、どこからか沸き起こる衝動に駆られ、喉から叫び

をあげながら。

僕は走る。

温もりを感じた。
全身にまとわりついた気だるさを、優しく、暖かく包み込んでくれるような感触。

僕はゆっくりと目を開いた。

まず視界に入ってきたのは霧。

まだ寝ぼけてるのかと思っただけどよく見ればこれは湯気の様だ。

首を動かすのも億劫で、視線だけを動かして見えてきたのは大小様々な大きさの岩と白く濁った半透明の水。

勉強部屋の隅にある温泉かな？

確か治癒効果があるんだっけ？原作でそんなシーンがあった気がする。

夜一様が入れてくれたのだろう、姿は見えないけどありがとうございませう。

温泉のお湯は暖かく、全身が溶けてしまいそうなほど気持ちいい。

……それにしても疲れた。

まだ意識が微睡んでいて頭が回らない。

はて、さっきまで何してたんでしっけ？

まあいいや、もう少しだけ休ませてもらいますね。

瞳を閉じて睡魔に身を任せる。

身じろぎしたときに感じた首の後ろから後頭部にかけての、柔らかくて暖かい弾力のある感触を楽しみつつ深く息を吸う。

温泉の臭いとは別の甘い香りと、頭を撫でられる感覚に不思議な安心感を感じつつ、僕の意識は沈んでいった。

……。

……。

……。

……。

……ん？

“頭を撫でられる感覚”？
ふと感じた違和感が睡魔を遠ざけた。
確かに今も優しく手で頭を撫でられている感じがする。
首の後ろにも柔らかかな感触を感じる。
明らかに岩肌の感触では無い。
なんだろう？

寝ぼけた意識の中、疑問に思い首の後ろに手を伸ばしてみる。
とてもとても柔らかく、それでいて触った指を押し戻そうとする弾
力。

気持ちいいなあ。

そして指先が他とは違った少し硬い感触を。

「んっ」

え？

ええ？

嫌な予感を感じつつゆっくりと目を開け、上を見上げてみた。

「やっぱり胸を貸して欲しいのなの？紅音？」

「……………夜一様……………」

そこには案の定、夜一様がニヤニヤと楽しそうな顔をして僕の顔を
のぞき込んでいた。
なんでこんなことに……………。

とりあえず落ち着こうと、夜一様から離れる為に立ち上がろうとし
て体中を走った鈍痛に思わず動きが止まる。

「これこれ、まだ傷は癒えておらぬ大人しく休め」

そう言っただけでガツチリと肩を掴まれ、元の位置へと戻されてしまった。
意識が不確かだった時とは違い、今はお互いの肌と肌が触れ合っ
ているという事が実感出来てしまって、温泉とは違う要因で僕の身体
を熱くさせた。

「……………えーと、夜一様？離して頂けないでしょうか？」

「断る」

即答ですか……………。

僕の肩を掴んでいた腕を首に回して離そうとしてくれない夜一樣。やれやれどうしたものか……。

「それにしてもお主、随分と落ち着いておるのう……もう少し慌て騒ぎだすと思っておったのに……つまらんのう」

「つまらんつて……いや、かなり驚いてますよ？気がついたら夜一樣と温泉に入ってるんですからね」

いや、本当ですよ、さっきから心臓がバクバクで耳の奥の血管がうるさいですからね。

「ふん？不能　というわけでもないか、どうやら驚いているのは本当のようじやのう」

そう言つてクスクス笑う夜一樣。

ちよ、今どこ見て言ってるんですか!?

ツッコミつつも後ろは振り向けない。

だつて恥ずかしいじゃないですか。

「で、これはどういう状況なんですかねえ？」

話を逸らす為に膝を立てて座り直しながら夜一樣に聞いてみる。

「お主が気絶してしまったから傷を癒すためにココに入ったんじやよ」

「……二人で入る必要なかったんじやないですか？」

「なんじや？嫌じゃったか？」

「……嫌……ではないですけど、問題ありますよ」

「僕には問題ない」

「……」

「まあ思った以上にお主が出来るもんじやから僕も張り切り過ぎて疲れたしのう……それに……」

「？」

「僕にも傷が出来てしまつたしのう」

その一言を聞いた瞬間、僕は思わず振り返つてしまつた。

相変わらず笑みを浮かべる夜一樣の顔。

その左側、こめかみから目の上にかけて鋭く切れた様な傷が出来て

いた。

「最後の攻防、儂の一撃を食らいながらもお主が放った一撃。儂の意識の死角、使い物にならないだろうと判断した“折れた左腕”の一撃じゃ」

無意識のうちにもその夜一様の傷に手を伸ばしてしまっ。

僕の手が傷に触れると、その手についた温泉のお湯の効果ですぐにその傷は消えてしまった。

僕の伸ばした手を夜一様の手が包む。

「お主の拳は確かに儂に届いたぞ」

夜一様ははつきりと力強く言ってくれた。

これを伝える為にわざわざ傷を残していてくれたのだろう。

「……ありがとうございます」

そう答える声は少し震えてしまった。

何とも言えない喜びが身体を包む。

届いた、と。

応えることが出来た、と。

「てい」

「あいた！」

その感動も束の間、何故か降り下ろされる夜一様のチョップ。

「じゃがあんな奇襲に頼るようではまだまだじゃ。折れた腕で拳を握れぬなら、とその腕を鈍器に見立ててなんの躊躇いもなく振り抜いた胆力は評価しよう。最後までそれを悟らせず、相手の攻撃に合わせ、相手の意識の外からそれをやってのけた集中力も評価しよう。じゃが生死を賭けた死闘ならともかく、高々稽古で、下手をすれば二度と片腕が使い物にならなくなるかも知れぬ奇策を行なった無謀で向こう見ずな考えは儂は許さぬ」

「いや……はい……申し訳ありません」

……いや、ごもつともです。

なんであんなことしたんだろう？

「……本当に解っておるのか？」

「はい、あの時はその……熱くなりすぎて、といますか……」
夜一様は本当に怒っているみたいです。
思わずため息を吐いてしまう。

本当になんであそこまで熱くなってしまったんだろう、自分の中にあんな熱血が潜んでいたとは思わなかった。

「……まあよい、それ以外にもいくつか癖があるのう、お主の斬魄刀は遠距離攻撃型かもしくはそれに類する能力を主に使って戦っておるな？ 間合いの癖が白打でも出ておるぞ？」

「……はい、遠距離しかできない訳ではないですが虚を相手にするときは基本的に遠くから攻撃しています」
怪我したくないですからねえ。

というかあれだけの戦闘でそんなことまでわかるものなんですか？
流石夜一様と言うところなんですかね。

「ふむ、しかし案の定、力を隠しておったなお主」

「いやいや、所詮八席の実力ですよ、夜一様に手も足も出ないのが現実ですから」

「戯けが」

「またもやチョップ、というか夜一様前隠して下さいよ……」。

「夜一様が動かたたびに山が揺れてますよ？」

「そしていつまで僕は夜一様膝の上なんだろうか……情けなくないですか？ 僕が。」

「高々八席の実力で僕の瞬歩に着いてこられるものか、僕に傷を負わせることが出来るものか、その程度の者なら最初の一撃で終わっておるわ」

「ニヤリと笑う夜一様。」

「それに僕は途中からそれなりに本気じゃったよ、斬魄刀を使わずに僕とここまで張り合えたのじゃ、誇つていいぞ」

「……それは光栄ですね」

「じゃがまだまだ荒削りじゃ、これからは僕が鍛えてやる」

「……………え？」

今なんと？

「白打と瞬歩、隠密機動の何たるかを叩き込んでやるうぞ！おおそ
うじゃ、ついでに斬術と鬼道関連を喜助に学ぶが良い！ククク、こ
れからは楽しくなりそうじゃのう」

なんとも楽しそうに今後の予定を語る夜一様。

いや、ありがたい話なんですが……。

「拒否権はないぞ？お主は負けたんじゃないからな」

先に逃げ道を塞がれた。

「さあ！そうと決まれば今は休め！明日からは忙しくなるぞ」

「……あの……仕事は？」

「知らん！そんなもの大前田にでもやらせておけ」

ええーと……その、大前田副隊長申し訳ありません。

夜一様に頭を抱えられ、逃げ出すこともできなくなってしまった。

後頭部に感じる柔らかな果実の感触で全く落ち着けません。が仕方な
い、このまま寝ますか。

後のことは起きた時にでも考えましょう。

「お、そうじゃそうじゃ」

目を瞑ろうとして、僕の頭を抑えていた拘束がとけ、不審に思っ
て後ろを振り返る。

「ッ！？」

どうかしましたか？という言葉は出なかった。

目の前に夜一様の顔があり、その唇で僕の口が塞がれてしまったか
らだ。

甘く柔らかな感触に僕の時間が止まる。

一秒か、一分か、それよりも短かった様にも感じるし、それ以上に
長かった様にも思えた。

気がついた時には唇に触れた感触は消え失せ、いたずらっぽく唇を
舐める夜一様がこちらを見ていた。

「儂に一撃をいれた褒美じゃ、続きはいずれ……のう？」

……。

僕は何かを言おうと口を動かすも何も言えず、ゆっくりと前に視線を戻す。

首に夜一様の手が伸び、軽く抱きしめられる。

僕の頭に顎をのせて鼻歌を歌いながら上機嫌な様子。

それに対して僕は……。

……のぼせそうです。

Disappeared Cats Tail part・B (後書き)

お待たせしました後編です。

はじめての戦闘描写、難しいです。

所々一人称じゃねえんじゃね？

つてところもありますが勘弁してやって下さい。

そしてニヤニヤ展開を書こうと思ったんですが私の腐った頭ではこんなもんです。

未熟です。

まだまだ勉強が足りませんがそれでもお付き合い頂ける方がいてくだされば幸いです。

おまけ

最近のBLEACHを読んでふと思いついたお話。

多分読んだ人が100人いたら216人位は思いつくんじゃないかなあというくだらないネタ。

正直死神代行消失編なんていつたどり着けるかもわからないので思いついたときに書いとけと思つた小話。

はじめに言つときますがフィクションです。

「なあイヅルよお」

「なんですか檜佐木さん」

「……羨ましいなあ」

「……そうですね、現世に向かった方たちはいいですねえ……出番があつて」

「人気順なのか？ そうだな？ そうに決まつてる！！ 朽木ルキアはまああの死神代行と縁があるからいいとして、なんでわざわざ隊長格が三人も出張るんだよ！ そんなに出番が欲しいか！！ 阿散井は副隊長でしゃしゃりやがつて！ 何より斑目はなんであそこにいるんだよ！ そこは隊長格として今は九番隊を実質任されてる俺だろ！ 人气的に考えても！！！！」

「檜佐木さん落ち着いてください……あとそれは無いです」

「……」

「……」

「それにしてもこの月島つて奴の能力　ああ、なんてつたつけ？」

「『ブック・オブ・ジ・エンド』ですか？」

「おおそれぞれ、えげつねえ能力だよなあ」

「実際悪夢ですよ、他人の記憶に自分をすり込むなんて……やられた方はそれに対して疑問も持てなくなるんですから……」

「だよなあ、俺はそんな奴とは戦いたくねえよ、戦つてる途中に一撃食らつたらあいつのことを幼馴染とでも思つちまうかもしれねえんだからなあ……ゾツとするぜ」

「……！！？」

「ん？ どうしたイヅル？」

「檜佐木さん……僕たちは思い違いをしているのかもしれない」

「あん？ どういうことだ？」

「彼の能力です“斬った相手の記憶に自在に自分の存在を挟み込む

”いや、その通りなのですがもつと解りやすい言い方があるのではないかと言うことです「

「?どういうことだつてばよ?」

「……そういう危険な発言はやめてください、要するに別の言い方に行けると言うことです」

「例えば?」

「相手の記憶に【自分の設定を作つて】そう思い込ませる能力”とかですかね」

「……………なん……………だ……………!?!?」

「気づいたようですね、そう斬つた対象に“設定を植え付ける”のです!例えば」

「例えば!その能力で俺がみんなを斬つたとして、“BLEACHの主人公は檜佐木修兵”とすることも」

「可能です。絶対に嫌ですが……………しかしこの能力の真の力はそれだけではありません!」

「ま……………まさか……………」

「そう、そのまさかです」

「俺がその能力で乱菊さんを斬つた時、乱菊さんに俺のことを“彼氏”とも“血の継らない義弟”とも“家庭教師の気になる生徒”はたまた“食べてしまいたい義理の息子”なんて事ができるとでも言うのか!?!?」

「……………そう、例えば僕が雛森君を斬つたとして“藍染隊長と僕をすり替える”事も“血が継っているけど大好きなお兄ちゃん”とも“ご主人様”とも“肉便器として使つて頂けるお方”とすることも可能なのです!!」

「お前怖えよ!後半鬼畜過ぎるだろ!」

「フフフ……………想像するとはからずも僕の『侘助』も面を上げてしまいましたよ」

「うまいこと言つたつもりか!?!」

まあ過去に起こった経験に上書きするだけだと思っのでこんなことはできないでしょうけどね。
しかしこうやって拡大解釈すれば……。

薄い本が出るな。

Bring It / Drink It / Shrink It

どうしてこうなった。

ぐらぐらと揺れる視界で周囲を見渡し、ズキズキと痛む頭で考える。気がついた時には自分の家にもかかわらず見覚えのない光景。

畳の上に布団もしくずに寝転がり、更には半裸の女性が折り重なるように隣で寝息を立てている。

左を見てみれば同じ様な格好でもう一人女性が寝ている。

先ほどとはまた違う頭痛を感じ、もう一度自分に疑問符を投げかける。

どうしてこうなった。

この状況を作ったであろう経緯が全く思い出せない。

嫌な汗をかきながら猛烈な喉の渴きを感じて周りを見る。

周囲に散乱していた瓶やらコップやらの中、まだ中身の入っているコップを見つけ、左右からガツチリとしがみつかれて動きを制限されながらもなんとか手を伸ばす。

しっかりとつかんだコップを口元に運び一気に飲み干した。

しかし、それでも渴きは癒えず、逆に焼ける様な熱さが喉を通る。

あ、これお酒だ……。

そう思った時には視界の揺れは更にひどくなり、僕は意識を手放した。

晴れ渡った空の下、僕は瀨霊廷の中を歩く。

今日は久々の休日ということで、特に目的もなくプラプラと散歩しているわけです。

今年で死神になって……えーと20年位？

見た目が全く変化しないものだから年月の感覚も大分薄れてしまってます。

それくらいの月日がたてば勝手知ったるなんとやら、瀟靈廷の街にも詳しくなりました。

特に食事関係のお店はいろんな人に連れてきてもらったり、自分で探したりして今日の様な休日によく食べ歩きに出かけているので美味しいお店はバッチリです。

今もかつて夜一様を探すうちに立ち寄った甘味処で買ったみたらし団子を頬張りながら歩いているところです。

このお店、五大貴族とかが居を構える所謂高級住宅街みたいな所にあるのでなかなか高いです。

みたらし、あんこ、よもぎなどの詰め合わせの10個入りで1800環、それを二つで3600環。

ですが売り子のお姉さんが3000環に負けてくれたので助かりましたよ。

また来てね、と言って貰ったのでまたいかないといけないなあ、よし今度隊のみんなの分も買って行くとしよう。

あ、今の僕の所属は。

「おや、貴公は……」

大きな屋敷の角を出たところ、不意に声をかけられた。

「これは、朽木銀嶺様、蒼純様ご無沙汰しております」

視線の先にいた二人、六番隊長と副隊長を確認し、深く頭を下げ

「よい、そう畏まるな数年前までは我が隊に所属していた貴公じゃ、もつと楽にせい」

「ありがとうございます」

「蒼咲とこんな所で出会うとはな、今日は休日かい？」

「はい、散歩の途中で団子を買ったところですよ」

「あの店か……どうじゃ、時間があるなら我が家で茶でも？」

「いえ、そのような……」

「四楓院や志波と交流があるのであろう？今更貴族の家に恐れを抱く事もなからう」

「そうですね父上、白哉も喜びます、是非よっていつてくれ蒼咲」

「……はい、それではお邪魔します」

何故か、朽木家にお邪魔することになってしまった。

まあいいか、休日だし予定もなかったし、朽木家の豪邸を拝見させていただきましょうか。

・
・
・

「はああ！」

朽木家の豪邸、その冗談の様に広い庭に気迫のこもった声と木のぶつかり合う音が響く。

声の主は朽木家の若様こと白哉様、木のぶつかる音は彼の持つ木刀が僕の持つ木刀に当たった時に発せられる。

朽木家の客間に通され、銀嶺様と蒼純様とお茶を啜り、僕が買ってきた団子をつまみながら他愛の無い世間話をしていると若様もそこに加わり、暫くはのんびりとした空気が流れていた。

そのうち、若様の鍛練を見てやってくれないか、という話になり、今に至るといっわけだ。

「やあ！」

袈裟斬りに振るわれた木刀を紙一重で躲し、お返しに横薙ぎの一撃を振る。

若様はそれを大きく後ろに跳ぶことで回避し、再び構えをとった。

「貴公、本気を出さぬか！」

肩で息をし、流れる汗を拭いもせずに若様は吠える。

対して僕は当然汗一つかいていない。

未来じゃどうかわからないけどさすがに今の彼には負ける気がしない。

「いやいや、若様、鍛練なんですからもう少し肩の力を抜きましょうよ」

「若様と呼ぶな！」

「おっと、ほら若様、冷静にならないと当たるものも当たりませんよっ」

「貴様また！私には白哉という名前があるのだ！ちゃんとそう呼べ！」

「それじゃあ、僕に当てることが出来たらちゃんと名前で呼ばせていただきますよ若様」

「……！？貴様……言ったな！後悔させてやる！」

こうやってすぐに熱くなる分はまだまだ子供だなあ。

しかしこうやって馬鹿にした態度は問題あるかな、と思って横目で銀嶺様を確認すると、縁側でお茶を啜りながら楽しそうにこちらを

見ていた。

完全に見世物になつてゐるなあ。

そう思つていると庭に蒼純様がやつてきた。

「おーい白哉、お前に客だぞ」

若様の攻撃を適当にあしらいながら、そちらを見る。

若様はその声を無視して僕に突つかかつて来てるし。

しかし、そこには誰もおらず、代わりに僕の後頭部が柔らかな、それでいて最近は何れ親しんでしまった感触に包まれた。

「紅音！こんな所におつたのか、暇なら何故儂の所へ来ぬ！」

「……夜一様こそどうしてここへ？」

「お主が見つからぬから暇つぶしに白哉坊と遊んでやるうかとのう、じゃがお主が見つかったからそれはやめじゃ、早速どこか」

「四楓院！誰が貴様などに遊んで欲しいと言つた！それに蒼咲は私との鍛練の途中だ！貴様は去れ！」

「ほう、白哉坊言うのではないか、人の恋路を邪魔する奴は……とい
うのを知らぬのか、儂はこれから紅音とくんずほぐれつお互いの粘
え」

「わあああああ！子供になんてこと言つつもりですか夜一様！」

「子供！？貴様私に向かつて子供と言つたな！？」

「いや、若様……それは」

「なんじゃ全部本当のことではないか、子供にもわかりやすく説明
してやるう、儂とお主の甘く熱い夜の」

「ちよ、夜一様！？」

誰か助けて下さい。

そう思つて銀嶺様の方を見るが、蒼純様と二人で楽しげに茶を啜つてこちらの様子を見ている。

平和そうでもいいですねえ、僕は逃げ出したいです。

「というか夜一様降りて下さいよ重　くはないですよ？夜一様キマってますから！は、離してください。」

いつの間にか肩車の体勢になって僕の首を絞める夜一様の足にタツブしつっ、この状況をどうしたもんかと考える。

「そつだ、夜一様、若様鬼ごっこをしましょう」

「「え？」」

「そつ、鬼ごっこです。ただしやるのはお二人で、鬼は若様がいいですね。見事勝利された方と今日一日お付き合ひしましょう」

「いや……しかし、先約は私だろう、ここは四楓院が引くのが」

「なんじゃ負けるのが怖いか白哉坊？」

「なにい！？」

正論を唱える若様に夜一様の挑発がかけられる。

いやあ、夜一様ノリノリですね、若様もすぐ熱くなるし。

「勝ち目が見えぬから勝負に乗らぬのであろう？まあ」

「ッ！？」

「こつやつて女子にやすやすと髪紐を取られるようではのう、朽木家の将来が心配じゃ」

僕の背中から消えた夜一様は若様の髪紐を奪い、堀の上に立っていた。とっさに反応できなかった若様は悔しげに顔を歪ませている。

「……そこを動くなよ四楓院……今から私の瞬歩で」

「朽木白哉！敗れたり！紅音は儂のものじゃのう」

そう言い残し、瞬歩で去っていった夜一様。

残された若様は怒りで身体を小刻みに震わせている。

「そうか……余程私の怒りを買いたいと見える……。よかるう、ならば知るがいい！私の瞬歩が！貴様のそれをとうに超えているという事をな！！」

そう叫んで若様は夜一様を追いかけて行ってしまった。

うーん、二人とも単純　否、乗せやすい　否、ノリがいいですねえ。

さて、この間に僕はお暇しますか。

「それでは、僕もそろそろお暇させていただきます」

「うむ、そうか……世話になったのう……白哉もあのすぐに熱くなる癖が抜ければ一皮剥けるんじゃないがのう」

「そうですね、素質は素晴らしいものがあります。流石朽木家の次期当主ですね」

「フッフ、おだてても何も出んぞ……いや、そうじゃな」

銀嶺様は何か思いついたのか、使用人を呼びつけ、一言二言告げる。すると恭しく礼をして使用人の人はどこかへ行ってしまった。

「貴公は酒は嗜むかね？」

「あまり飲みませんが多少は」

「そうか、我が家が鼻肩にしている酒屋の一品じゃ受け取りなさい」

席を離れた使用人の人が戻ってくると、その手にもっていた木箱を銀嶺様に手渡し、それを僕へとすすめてきた。

その木箱には達筆で『幻想殺し』と書かれている。

「これは……流石に受け取れません」

このお酒、お手頃な値段と良質な味わいということで尸魂界一と名高い酒蔵の主人が自分が望む究極の逸品を、と完全に趣味で作ったとされる物で、市場には滅多に出回らない代物。

お値段は確か15万環位だったと聞いたことがあるけど、余りの入手の困難さからその倍から桁が二つ位増える値段でも取引される様な、酒好きには喉から手が出るどころか足まで出そうな程の幻の逸品。

酒をほとんど知らない僕でも聞いたことがあるくらいの本物の名酒だ。

そんな代物をポンと出してくるんだから流石は五大貴族。

「なに、団子と白哉の相手をしてもらった礼じゃ」

「いえ、その礼にしては余りにも礼が勝ちすぎてますよ」

「なに構わんよ、遠慮せず受け取るがよい」

それでも僕が躊躇していると、銀嶺様はニヤリと笑いながら続けた。

「ふむ……礼が大きいと思うのなら、また我が家で白哉の鍛錬に付き合ってくればよい」

「……………礼に釣り合うにはどれ位通えばいいんでしょうね」

「ハツハツハツ、そう心配せんでも良い、たまには顔を見せに来说うておるだけじゃ、茶ならいくらでも出そう」

「白哉も随分君を慕っているんだ、また会いに来てやってくれ」

蒼純様からも言われ、渋々手を伸ばし、『幻想殺し』の入った木箱を受け取る。

「それでは……………ありがたくいただきます、また近いうちにお伺いしますね」

「うむ、いつでも来なさい」

「あの子もきつと喜ぶ、遠慮なく訪ねてくれ」

「はい、必ず、……それでは失礼致します」

縁側でお茶を啜る二人に深く礼をして広大な朽木家の敷地を後にする。

うーん、これから何度もお邪魔しなければならなくなってしまったかなあ。

ため息を一つ吐き、気持ちを切り替える。

さて、まだまだ今日は休日だ、次は何処へ行こうか。

木箱を片手で抱えながら今度は高級住宅街を抜けて一般的な死神達が住む地域に出てきた。

さて、団子は食べてしまったし次は何を食べようかな？

折角いいお酒を貰ったんだから何かツマミになるような物でも買って帰ろうか。

普段はほとんど飲まないけどたまの休日だし一度酔うまで飲んでみるのもいいかもしれない。

それじゃあ、ツマミと言えば……イカかなあ？焼き鳥とかもいいなあ、日本酒だし刺身なんかも……。

やばい、すぐくお腹が空いてきた。

自分で作るのもめんどくさいし、どっかそのへんのお店で作ってもらって持って帰らせてもらおうかなあ。

と、これからの事を考えていると前方に見知った人物がいることに

気がついた。

死覇装に身を包まれた眼鏡をかけた小さな女の子が、同じく死覇装に眼鏡をかけた女性と、とあるお店の前で仲良さげに談笑している。まるで姉妹みたいだなあ、と微笑ましく思っていると向こうもこちらに気づいたみたいなので声をかけてみることにした。

「どうも矢胴丸副隊長、七緒ちゃんお久しぶりです」

「久しぶりやね、リサでええって言うてるのに固っ苦しいやつやなあ」

「おっ…お久しぶりです、蒼咲さん！」

呆れたように言う八番隊副隊長の『矢胴丸リサ』さんと少し緊張気味に応えてくれた同じく八番隊の『伊勢七緒』ちゃん。

なんだかその反応が可愛くて思わず七緒ちゃんの頭を撫でてしまった。

つて、俯いてモジモジしちゃった、嫌だったかなあ……失敗失敗。

「二人で買い物ですか？」

とりあえず空気を変えようと七緒ちゃんの頭から手をどかして聞いてみる。

二人ともなにやら紙袋を持っているので多分そうなんだろう。

「ああ、この子に本を買ってあげてたんや」

そう言って包みから一冊の本を……………。

「あ、ちやうちやうこれはあたしのやつたわ」

そそくさとした本は詳しくは見えなかったが明らかに表紙の女

性の肌色が多い本だった。

こんな人に七緒ちゃんを任せて大丈夫なのかと少し不安になってしまふ。

「……………七緒ちゃんにそんなの見せないで下さいよ？」

「アホ、流石にまだ早いわ、心配せんでも紅音にはちゃんあと後で貸したるから」

「……………いりませんよ」

「ん？ちよつと迷ったんとちがうか？」

「……………」

興味がないとは言いきれませんが。

ちよつと七尾ちゃんも不思議そうにこつちを見ないで、いたたまれない。

「おゝい、リサちゃん、ひどいよ置いていくなんて」

「あたしらほつといてチヨロチヨロしとるからや」

そう声をかけてやってきたのは隊長羽織の上に更に派手めの羽織を肩にかけてたナイスミドル。

八番隊長『京楽春水』。

「いやいや、申し訳ない。でもおかけでいいものが手に入ったよ。

……………と、蒼咲君かい、ひさしぶりだねえ」

「お久しぶりです京楽隊長。ご機嫌ですけど、それですか？」

手にもつた木箱に頬ずりするほど上機嫌な京楽隊長。

「ん？これかい？これは」

「酒や、全く毎度毎度飽きもせんと……………」

「つれないねえリサちゃんは……、それにこれは只のお酒じゃないんだよ？なんてったって」

「はいはい、あたしは酒は飲めたらそれでええから興味ないわ」

「はあ……、全くつれないねえ。蒼咲君ならわかつてくれるかい？
このお酒は………」

今度は僕の方に話を振ろうとしてきたんだけど僕は七緒ちゃんとお話中ですよ？

それでもなんだか固まってしまっている京楽隊長が気になったので視線で問いかけてみる。

「あ……蒼咲君？そ、その手に持っているのは………」

手を震わせながら僕が持っている木箱を指差すので、その手に木箱を差し出してみた。

浮竹隊長は壊れ物を扱うようにそれを手に取り、改めてじっくりとその木箱を確認する。

「げ、げげげ『幻想殺し』じゃないかあああああ！……！」

京楽隊長の絶叫に僕たちは思わず耳を塞ぐ。

「うるさいなあ、急になんやの？」

「いやいやいやリサちゃん！幻想殺しだよ？幻想殺し！！あの幻のお酒だよ！？『酒は飲まないなんて立ち止まってんじゃねえ！酒は飲み飽きたなんて達観してんじゃねえ！酒は　　が一番うまいなんて勝手に見切りつけてんじゃねえ！そうやってどいつもこいつも諦めてるってんならいいだろう、まずはそのふざけた幻想をぶち殺す！！』って有名なアレだよ！？」

「確かに聞いたことはあるけど……キャッチフレーズ長いな」

「それが今日の前にあるんだよ!? 落ち着けてっていうのが無理な話じゃー!」

リサさんが文句を言っても気にせずまくし立てる京楽隊長。

そういえばお酒好きだったなあ、好きな人には確かにとんでもない逸品だけどここまで興奮させてしまうとは。

つとまずいなにやら注目を集めてしまった。

「よかつたら一緒に飲」

「いいのかい!? もちろんよろしくお願いするよ! ボクが手に入れた『一方通行』も振舞うからさ!」

すごい食い気味でこられた、そんなに飲みたかったんですか。

「それやったらせつかくやしあたしも行くわ、場所はどないするん?」

「そうですねえ……ウチで飲みますか? 何もありませんけど」

「ボクはどこでも構わないよ! ツマミもたくさん持っていくから! こうしちゃいられない! 直ぐに支度して向かうからまた後でね!」

「……行つてもたし……」

「あ、あの!……わ、私も邪魔してよろしいでしょうか!??」

「うん? いいけど……、ただしお酒はまだ飲んじゃ駄目だよ? それにもしかしたら酔っ払いだらけになつてあんまり楽しくないかもしれないけどそれでも大丈夫?」

「はい! よ、よろしく願います!」

「心配せんでもあたしが飲ませへんて、そしたらこのリサ姉さんが性のつくもん作つたるやないか」

「なんだか不安な気がしますけどお願いしましょうかね」

「そしたらあたしらも支度しに行こか、ほなまた後で」

「また後で、し、失礼します」

去っていくリサさんと七緒ちゃんに手を振りながら僕も足を進める。飲み会をやることになったし、時間はそろそろ夕飯時だ、食材とお酒もいくつか買って帰ろう。

簡単な料理なら僕でも出来るけど、どうしようかなあ。

とりあえず、食材を求めてボクは商店街へ向かうことにした。

・
・
・

「おや？」

「……あ」

買い物を終えて家路を歩く途中、見知った人物に出会った。隊長羽織をまとった落ち着いた大人な雰囲気的女性。

「こんばんわ卯ノ花隊長」

「こんばんわ蒼咲さん」

女性死神協会会長で今僕が所属している四番隊隊長、『卯ノ花烈』隊長だ。

だいぶ霞んでしまった僕の記憶の知識と違い、綺麗な長い黒髪は後ろで纏められていた。

「こんなところで出会うのは珍しいですね、どこかへ行かれていたんですか？」

「ええ、今日は“休日”でしたので薬草探しに行ったり、街を散策したりしていました。確か蒼咲さんも今日は“お休み”でしたね」

「はい、僕も久しぶりの休みだったので散歩がてらに食べ歩きして

いましたよ」

うん？なんだろう、なんだか変なアクセントが着いてる気がするんだけど。

卯ノ花隊長は柔らかな笑顔を浮かべている。

「そうですか、“休日”は楽しめましたか？」

「そうですね、いい気分転換になりましたよ」

「それはよかったですね、私も久しぶりの“休日”を満喫できましたが、やはり“一人”というのは少々物足りなく感じるものですね」

「一人も悪くはないですけど、やっぱり誰かと一緒に楽しむのが一番かもしれません」

「そうですね、特に異性と共にするのが一番でしょう」

「うーん、それは人それぞれじゃないですか？気心の知れた友人と、というのも悪くないと思いますよ？」

「それもそうですね、……ともかく私は今日“お休み”でした」

「ああ、はい……そうですね」

「……蒼咲さんも今日は“お休み”でした」

「ええと、……はい、そうです」

卯ノ花隊長は柔らかな笑顔を浮かべている。
あれ？なんだろう、変な汗が出てきてます。

「今日は“二人とも休日”でした」

「ええと、……そうなりますね」

「その“二人”が“一人”でいたのは何故なんでしょうね？」

「ええーと、……何故なんですかねえ？」

「……」

「……」

「……今日は“二人とも休日”でした」

「そ、そうでしたね」

まずい、よくわかんないですけどなにやらまずそうです。
こういう時はどうすればいいのか……何より変な汗が止まりません。
あ、そうだ。

「そ、そうだ、よかつたら今から家でお酒でも飲もうかと思ってる
んですけどよかつたらいかがですか？」

「あら、お酒ですか？」

「はい、何人が後で来るんですけど夕飯と一緒にしようかと」

「……………二人つきりではないんですね……………」

「……………ん？何か言われましたか？」

「いえ、何も……………そうですね、ではご一緒させて頂いてよろしいで
すか？」

「もちろんですよ」

「それじゃあ、夕飯は私が用意させてもらいますね？台所をお借り
してもよろしいですか？」

「そんな、そこまでしてもらわなくても……………」

「いえいえ、せめてそれくらいはさせてください」

「うーん、……………そうですね、ではよろしくお願いします」

「はい、任せてください」

よし、なんだかよくわからない汗は消えた。

そんなわけで二人で僕の家へと歩いていく。

卯ノ花隊長なら美味しいご飯を作ってくれそうだから今から楽しみ
だ。

「はあ〜ち番隊隊長！京楽春水！……歌います！！」

「ワハハハハ、ええ〜ぞ〜！待ってましたあ！」

「こ、こら春水！あんまり騒ぐと迷惑に」

「かったい事言いなや、ほれ、浮竹も飲みが足らんのんちやうかあ」

）」

「そうつすよ隊長！ほら飲んで飲んで！！」

「アハハハハハハ！フヒヒヒヒヒヒヒ！」

「おい、ウゼエな……、誰だよこいつに飲ませたやつは！」

「京楽さん！そんな歌じゃ全然届かないよ！俺の歌を聞けえええ！」

「！」

「あーかーねー！何処におるんじやー！」

「ええか？七緒、男つてのは獣やなんや言うけれどもあいつに関してはそうやないんや。せやからあたしみたいに自分からこう……ガバっと」

「……………」

「何をこんなところで寝くさつとんやアホが！起きんかい！」

「お酒の追加買ってきました！」

「……………」

「……………」

カオスだ……。

どこから聞きつけたのか色んな人がやって来て気がついたら10人以上の大宴会。

飲むわ食つわ泣くわ笑つわ歌つわ踊るわ。

大宴会。

大宴会と書いてカオスと読むくらいの騒ぎっぷり。

みんながみんな酔っ払いで、その中にいる七尾ちゃんがかわいそうか、と思っただけならやら真剣な顔で酔っ払いの話を聞いてるから大丈夫なのかな？

「こら！蒼咲イ！そんなところで休んどらんでこつち来んかい！」

「はいはい！ツマミがないって取りに行かせたの平子隊長じゃないですか」

「あーかーねー！酔じゃー！はよこーい！」

「今行きますからちよつと待ってくださいー！」

「あたしもやでー！口で！」

かく言う僕も飲んでます。

今はとつてもいい気持ちです。

『幻想殺し』はさすがの名酒、癖なく透き通る味わいと飲みやすさ、それでも確かに感じる喉を通る熱は極上といえます。

あまり酒を飲まない僕でも美味しいと思うんだから本物でしょう。

ただ、全然飲んでませんが弱い僕には流石に限界が近いので今は水ばかり飲んでます。

「手伝いましょうか」

「え？ああ、それじゃあお願いします」

そう言っただけを付けてくれたのは卯ノ花隊長。

僕なんか目じゃない結構な量を飲んでいた全く顔色は変わらず、足取りもしっかりしている。

強い人はすごいなあ、と思いながらツマミの用意をしているんですが……。

あの………近くないですか？

文字通り肩が触れ合うほど、というより完全に当たってます。

そこまで広くない台所とは言っても二人なら余裕でいられる広さは

あるはず。

かといってあからさまに距離を空けるのは失礼だろうし。違う場所に作業の為に動いてもスッとまた隣に移動してくる。

「あの……卯ノ花隊長？」

「はい、なんででしょう？」

と、声をかけてみると　近い近い！

僕の顔をのぞき込むようにする卯ノ花隊長との距離はお互いの息に触れるほど。

よく見ればお酒のせいか頬はほんのりと上気し、瞳は潤いをみせ、言葉を紡ぐ唇は赤く濡れてなんとも艶っぽい。

「あの……近すぎませんか？」

一瞬言葉を忘れて見とれてしまったけど、なんとかその言葉がでてきた。

「……そうですか？私は気になりませんが？」

「そうですね、僕は気にします」

「フッフ、そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ」

卯の花隊長はどこ吹く風、これが大人の余裕と言っ奴ですか……。

僕がどうしたもんかと固まっていると、宴会場から早く来いと催促が飛んできた。

この助け舟に乗らざるをえまい。

「ほら、みんな待ってるみたいですよしね？」

「……………」

「いや、……嫌な訳ではないですよ？ほら、勘違いしちゃいますよ

こんな状況じゃあ」

「勘違いですか？ いいじゃないですか、その程度でしたら問題ないでしょう？」

「僕が、ですよ。一応男ですよ？僕は」

って何を言ってるんですかね僕は。

いや、当然美人に寄り添われて勘違いしない男なんていないだろうけど、なんでわざわざそれを言うんだよ。

いかん、酔いのせいかうまく思考が纏まらない。

うん、意味不明な言動もこの状況も全部酔いのせいにしてしまおう、お酒って便利だなあ。

「……そうですか、仕方ありません。……今はそれで良しとしまし
よう」

渋々、といった感じで離れてくれた卯ノ花隊長。

「そういうわけで、このお酒を飲んでください」

どういうわけなのかはわかりませんが何処からともかくお酒の並々注がれたグラスを差し出す卯ノ花隊長。

一体どこから取り出したんだろう？

「変なものは入っていませんよ？……っほら、私も飲んだんですから大丈夫でしょう？」

「いや、そういうわけじゃ……ただ正直もう限界なんで……」

「……そうですか、私が入れたお酒は飲んでいただけませんか……」

「ええーと、その……」

「いいんですよ、ほかの方のは飲めて私のは………グスン」

いやいや、卯ノ花隊長も散々飲ませてきたじゃないですか。

やっぱりこの人も酔ってるみたいだ、普段とちよつとキャラが違う。ため息を一つついてグラスを受け取る。

鼻を近づけてみてもそこまで強い臭いを感じないので、普通のお酒なんだろう。

周囲が酒の臭いに満ちているから麻痺してるだけかもしれないけど。卯の花隊長も機嫌を直してくれたみたいだし、今日はこれで最後と
言うことで。

「アッ!？」

さっさと飲んでしまおうと一気に煽ったのは失敗だった。

熱い。

これ、酒って言うよりアルコールじゃないのか？

卯の花隊長は平気な顔でこれを飲んでたけどどんだけ強いんだよ。

「だ、大丈夫ですか？」

視界が揺れて、足元がふらついたとき、抱きしめるようにして卯の花隊長に支えられなんとか倒れることはまぬがれた。

やばい、視界が暗くなる。

視界の端に卯の花隊長の意味深な笑みが写ったのを最後に、僕の意識は沈んでいった。

僕が再び目を開いたとき、周囲は嘘のように綺麗に片付けられていた。

相変わらず思考の邪魔をする頭痛に抗い、いつの間にかくるまっていた布団から起き上がり、視線を動かす。

前に目を覚ました時とは違い、昨日この場所で大宴会が行われていたとは思えないほどの清潔さ。

むしろその前よりも綺麗に片付いているのではないだろうか？

ズキズキと痛む頭を抑えながら喉の渴きを感じると枕元に水差しを見つけた。

反応の鈍い身体にうんざりしながら手を伸ばすと、どこからか伸ばされた手が水差しをとってコップに注ぎ、差し出された。

ポーっとした頭でコップを受け取り、しかし同じ轍は踏まないと一度臭いを嗅ぎ、舌先で味を確かめる。

間違いなく水だ。

そう安心すると喉の渴きにしたがって一気に飲み干す。

「ようやく起きましたか、もうお昼ですよ？」

大きく息を吐いて、一心地ついていると声をかけられた。

声の主は僕の手にあるコップに水を注ぎ直し、ニコリと柔らかい笑みを浮かべている。

「……………卯ノ花隊長がどうしてここに？」

「あら？……………覚えていないんか？」

なんだろう、何かあったんだろうか？

なにやら笑顔が怖いんですが。

コップに口をつけながらどうしたもんか、と記憶を掘り起こす。

「えーと、昨日は飲み会をやりましたよね？そういえば他のみんな

は？」

「皆さんにはお帰りいただきましたよ、いつまでたってもうーうー唸りながら動こうとしなかったので強制的に」

「……大丈夫なんですか？」

「四番隊特製の二日酔いの薬をお渡ししたので大丈夫です。紅音さんの分もありますのでどうぞ」

「……ありがとうございます」

そう言っただけで渡された薬を口に含み、水で流し込む。

とんでもなく苦い。

飲みすぎには気を付けないとなあ。

「勝手に申し訳ないですが、掃除もさせていただきました。そのままにしておくには余りにもひどかったのです」

「あ、いや本当にすいません、ありがとうございます」

みんなを帰してくれたただけじゃなくて、片付けまで……。

というか、なんで卯ノ花隊長は平気な顔してるんだろ。

かなり飲んでたと思うんだけど……これがザルってやつなんですかね。

「気にしないで下さい、私が好きでやったことですから」

「いや、それでも申し訳ないですよ、今度何かお礼させてください」

「いえいえ、……それにお礼ならもう貰ってますから」

「……え？」

よくわからないことを言われて、下げていた頭を戻して卯の花隊長を見る。

改めて見ても相変わらず卯の花隊長は笑顔を浮かべていたが、その姿にどこか違和感を覚えた。

どこが………あ、後ろ髪を前に纏めてるんだ。

「どうしました？……何か変ですか？」

僕の視線に気づいたのか、指先で髪を梳きながら尋ねてくる。

「いえ、良く似合ってますよ。でもどうして急に髪のみとめ方変えちゃったんですか？」

つてこんなこと聞くの失礼かな？

髪型位気分で変える時もあるだろうし、わざわざ聞くことじゃなかったなあ、もう遅いけど。

「………こういうものは見せつける様な物でもないでしょう？」

「………こういうもの？」

「あら、………本当に覚えていないんですか？」

呆れた様に言われてしまったけど、一体何のことだろう。

卯の花隊長はため息を一つつき、自分の髪を纏めていた紐を解いた。纏まっていた長く綺麗な黒髪が解けて流れる。

その光景に思わず見とれてしまっていた僕だけど、今まで隠れていた卯の花隊長の首筋を見たとき、体中から嫌な汗が噴き出すのを感じた。

全く身に覚えがないけど、卯の花隊長の笑顔が何かを物語っている。その首筋には虫に刺された様な小さな痣がいくつつかっついていた。

「………ここだけじゃないですよ？他にもまだまだ………」

「………」

「………覚えてませんか？」

「………」

「お酒が入っていたとはいえあんな事になるとは思いませんでしたよ」

「……」
「あんなに激しく求められてしまったら私だって……」

「……」
「お酒のせい……という言い訳をするつもりはありませんね？」

「……」
「責任とっていたいただきますからね？」

「……」
「……」
「キスが好きなんですね？」

「ッ！！？」

もうだめだ！

あまりの恥ずかしさに布団にくるまって逃避する僕。

この状態も恥ずかしいけど、もう知らん。
死ねよ昨日の僕。

なんにも覚えてないってどういことだよ。
何したんだよ僕は！？

「……お疲れみたいですから、また後でおはなししましょうか。ゆっくり休んでくださいね」

布団にくるまった僕を優しくポンポンと叩く感触で思わずビクリと反応してしまう。

小さな笑い声と共に、卯の花隊長が立ち上がる音が聞こえる。

「食事の用意もしてありますので、お腹がすいたら食べるようにして下さいね」

「……ありがとうございます」

布団からは出れないけれどお礼だけは言わなくては。

「そういえば、……甚だ不本意ですが私以外にも同じように紅音さんに痣を付けられた人がおはなしに来ると思いますけど頑張ってくださいね？……それではまた後日お会いしましょう」

最後に更なる爆弾を落としてから卯の花隊長の気配は離れていった。頭が痛い。

二日酔いだけじゃなくてこんな状況をつくってしまった自分自身に頭痛がする。

昨日は一体何をやらかしてしまったんだろうか。

とりあえずは布団にくるまった格好のまま、この現状からの逃避の為に寝ることに意識を集中する。

万全の状態じゃないとこの場は切り抜けられそうにない。だから僕は眠ることにした。

二度と酒は飲むまいと魂に誓いながら。

どうもご無沙汰しております。

ほぼ丸々一ヶ月ぶりの更新です。

色々言い訳はありますが全て言い訳ですので本当に申し訳ないといか言えません。

もしそんな中でも待つて頂けている方がいて、見捨てずにお付き合頂けるなら嬉しい限りです。

さて、内容に関してですが相当な難産でした。

「卯ノ花隊長の髪型ってキスマーク隠すのに使えるんじゃない？」という、誰も彼もが思いつくであろうくだらない思いつきから始まっています。

え？ないですか？いや思ったことある人はいるはずです。

その思いつきからキャツキャウフフな話を書こうと思ったならこのまです。

本当にイチャラブな展開を期待してる方には申し訳ないです。

そういうお話は私には書けないよ……。

改めて思ったんだけど主人公が割とゲスです。

ラブコメっぽい展開をしようとする描写が足りない僕の書き方が悪いんだけど、すごいクズに見えてしまう……。

個人的にはそれはそれでいいか、と思ってるんですけどね。

それでも嫌悪感もたれる方はいるかもしれないんでそういう方は見切りつけちゃってください。

この後についてなんですけど暫くはゆっくり進めようと思ってたんですが。

自分の妄想のペースと執筆のペースにえらい開きがあつてモチベーションが下がつてしまつてるのでストーリーを進めてみたいと思つてます。

気が付けばPV七万超えとか、嬉しいを通り越してポカーンとしてしまいました。が読んでいただいた方には本当に感謝しています。気に食わない点がありましたらいつでも見切りをつけてやって下さい。

その中でお付き合い頂ける方がおられれば今後もよろしく願います。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3268w/>

BLEACH ~ The Strange Record ~

2011年10月28日03時04分発行